

## <調査2> 実習・演習教員養成モデル講習会

2010年2月18日、19日は演習担当教員、2月20日、21日は実習担当教員を対象としたモデル講習会を開催した（資料2）。その概要は以下のとおりである。

その受講者と講師への講習内容に関するアンケート（資料3・4・5）と、実習講習受講者への講習の事前事後の意識調査（資料6）、同じく、実習講習受講者を対象としたフォーカス・グループインタビュー（1グループ：5名）を実施した（資料7）。

### 【実習・演習教員養成モデル講習会実施概要】

#### ①モデル講習会の目的

【演習】講義科目で学んだ専門的援助技術を体系立てて理解が深まるよう教授しながら、相談援助の知識と技術をより実践的に習得させる授業展開をめざす。

【実習】精神科医療機関および障害者自立支援法に基づく地域事業所等への配属実習における事前学習、実習中指導、事後学習を通し、専門性を獲得できる授業展開をめざす。

#### ②演習の実施内容

科目名	目的	内容
精神保健福祉援助演習指導概論 （講義：60分）	精神保健福祉等の科目との関連性も視野に入れつつ、求められる相談援助の知識と技術を習得できるような効果的なシラバスの作成方法を理解する。	●演習シラバスの作り方 シラバス作成の留意点 ●演習方法の概要 ●演習教材の概要 ●成績評価の方法と実際
精神保健福祉援助演習指導概論 （演習：90分）	具体的なシラバスの作成方法を演習を通して検討する。	●演習シラバスの作成と討議
精神保健福祉援助演習方法論Ⅰ （講義：60分）	総合的・包括的相談援助での協働・連携について、個別および集団援助技術の具体的な援助場面を想定した実技指導（ロールプレイ等）を中心とする援助形態により行う。	●個別援助技術の演習プログラムの展開方法 ●集団援助技術の演習プログラムの展開方法
精神保健福祉援助演習方法論Ⅰ （演習：180分）	事例を題材として具体的な場面の相談援助の過程を想定した実技指導を行う。	●演習教材の活用方法 ●ロールプレイ等の実技指導
精神保健福祉援助演習方法論Ⅱ （講義：90分）	地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な事例をもとに演習の方法を考える。	●演習教材の活用方法 ●コミュニティワークの事例をもとに展開
精神保健福祉援助演習方法論Ⅱ （演習：90分）	地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な事例をもとに演習の方法を考える。	●地域住民のニーズ把握 ●地域アセスメント ●地域福祉の計画 ●社会資源の活用と開発

精神保健福祉援助演習方法論Ⅲ (講義：60分)	ケアマネジメントの具体的な事例をもとにケアマネジメントの演習方法を理解する。	●アウトリーチ ●ケアマネジメント ●チームアプローチ ●ネットワークング ●ストレングス等の理解
精神保健福祉援助演習方法論Ⅲ (演習：180分)	ケアマネジメントの具体的な事例をもとにケアマネジメントの演習の実際。	●アウトリーチ ●ケアマネジメント ●チームアプローチ ●ネットワークング ●ストレングス等具体的な事例を活用

### ③実習の実施内容

精神保健福祉援助実習指導概論 (講義：60分)	実習教育における実習担当教員の基本能力の概説と実習教育の展開について概説する。	●実習マネジメント ●実習プログラミング ●実習スーパービジョン ●実習教育評価
精神保健福祉援助実習指導概論 (演習：90分)	実習教育における実習担当教員の基本能力の概説と実習教育の展開を概説する。	●実習マネジメント ●実習プログラミング ●実習スーパービジョン ●実習教育評価
精神保健福祉援助実習指導論Ⅰ (講義：60分)	障害者自立支援法に基づく事業所への実習事前・実習スーパービジョン・事後指導教育の在り方と展開を概説する。	●実習事前指導内容 ●実習中指導内容 ●実習事後指導内容
精神保健福祉援助実習指導方法論Ⅰ (演習：180分)	障害者自立支援法に基づく事業所への実習事前・実習スーパービジョン・事後指導教育の在り方と展開を習得する。	●実習事前指導内容 ●実習中指導内容 ●実習事後指導内容等ワークシートを活用
精神保健福祉援助実習指導論Ⅱ (講義：60分)	精神科医療機関への実習事前・実習スーパービジョン・事後指導教育の在り方と展開を概説する。	●実習事前指導内容 ●実習中指導内容 ●実習事後指導内容
精神保健福祉援助実習指導方法論Ⅱ (演習：90分)	精神科医療機関への実習事前・実習スーパービジョン・事後指導教育の在り方と展開を概説する。	●実習事前指導内容 ●実習中指導内容 ●実習事後指導内容等ワークシートを活用
精神保健福祉援助実習指導論Ⅲ (講義：120分)	日本精神保健福祉士協会との合同企画	
精神保健福祉援助実習指導方法論Ⅲ (演習：100分)	日本精神保健福祉士協会との合同企画	

(1) 精神保健福祉援助演習講習会受講者へのアンケート結果

①参加人数: 15名

②年齢

表49 参加者の年齢

	人数	%
20歳代	1	6.7
30歳代	3	20.0
40歳代	6	40.0
50歳代	2	13.3
60歳代	3	20.0
70歳代以上	0	0.0
計	15	100.0

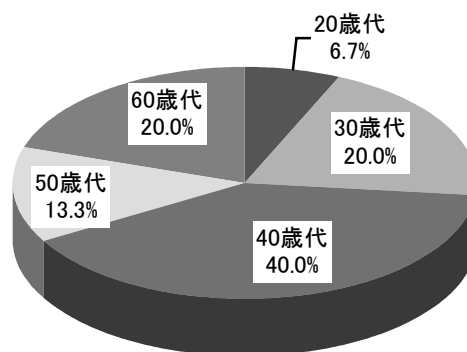


図6 参加者の年齢

③性別

表50 参加者の性別

	人数	%
女	7	46.7
男	8	53.3
計	15	100.0

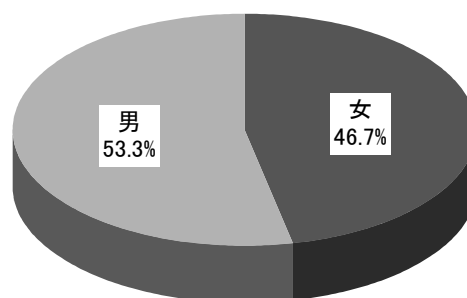


図7 参加者の性別

④精神保健福祉士国家資格の有無

表51 国家資格の有無

	人数	%
有	14	93.3
無	1	6.7
計	15	100.0

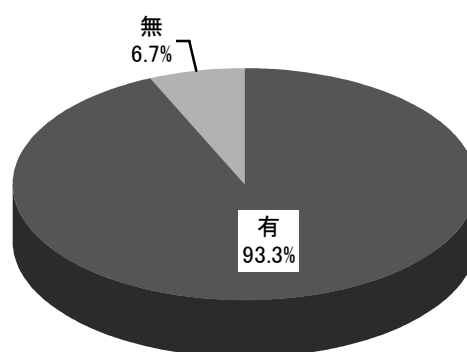


図8 国家資格の有無

⑤資格が有ると答えた人の現場経験の有無と年数

表52 現場経験の有無

	人数	%
有	13	92.9
無	1	7.1
計	14	100.0

\*現場経験の年数：

平均 159.1 か月（最長 384 か月、最小 24 か月）

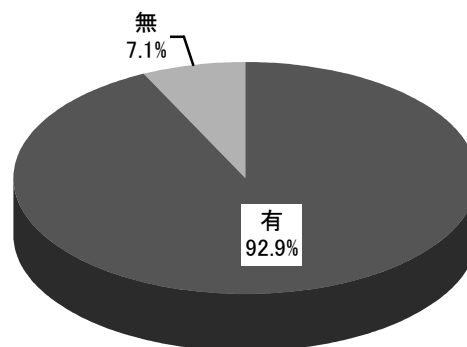


図9 現場経験の有無

⑥専任教員になってからの年数 平均 86.5 か月（最長 192 か月、最小 11 か月）

⑦精神保健福祉援助演習の担当をしているか否か

表53 演習担当の有無

	人数	%
担当している	9	60.0
担当していない	6	40.0
計	15	100.0

\*演習を担当してからの年数：

平均 71.6 か月（最大 143 か月、最小 34 か月）

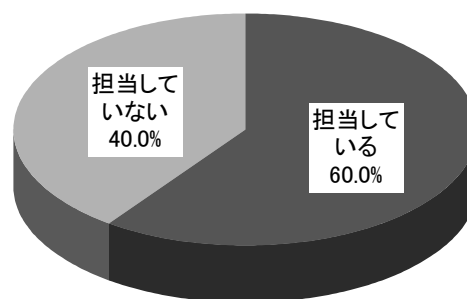


図10 演習担当の有無

⑧参加した動機(複数回答)

表54 参加動機

	人数
自分の研鑽のため	12
職場からの勧め	4
知人等からのすすめ	0
その他	3

⑨開催時期について

表55 開催時期

	人数	%
この時期でよい	8	53.3
その他	7	46.7
計	15	100.0

\*その他の意見

- ・8、9月、3月
- ・もう少し遅く（3月）
- ・春休みがよい（3月20～31日の間）
- ・お知らせを早めていただくことが可能であればいつでも可

⑩開催場所について

表56 開催場所

	人数	%
便利	7	46.7
まあ便利	5	33.3
普通	2	13.3
やや不便	1	6.7
不便	0	0.0
計	15	100.0

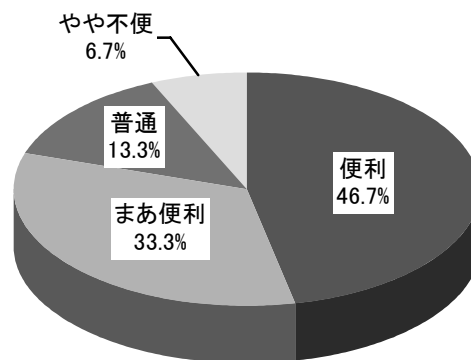


図11 開催場所

⑪演習の講習内容に関する意見

■精神保健福祉援助演習指導概論(講義:60分)

表57 精神保健福祉援助演習指導概論

	人数	%
とても参考になった	7	46.7
まあ参考になった	6	40.0
どちらともいえない	0	0.0
あまり参考にならなかった	0	0.0
全く参考にならなかった	0	0.0
NA	2	13.3
計	15	100.0

\* 自由記述

- 全体との関連に関する意見が聞けた。
- 循環、つなぐ力など参考になった。
- カリキュラム改正の動向がうかがえてよかったです。演習における教材開発についてや教員に求められる力量について、さらにおききしたかったです。
- 精神保健福祉士養成の在り方についての情報とお考えを伺えて良かったです。学内でP S W養成の在り方について提案していきます。
- 演習授業の意義を再確認いたしました。学生のアイデンティティ形成、柔軟性と技量の向上、研究(学習)方法の取得のための要になる授業だと思います。学生には考え方の枠組みを学んでもらえるとよいと思います。
- 最新の法改正の動向等をご教示下さり参考になりました。90時間の演習方法についての説明である程度理解できた。社会福祉士の演習との関連性についても説明があればと思いました。
- 精神保健福祉士の養成の今後の方向性についても聞けてよかった。
- 「概論」の授業であるため、妥当な内容であるのだとも思いますが、レジメに記述下さった部分について、もう少し具体例をあげて(授業の方法例など)お話頂けたらと思いました。レジメを配布頂けたことはありがたかったです。
- 演習の組み立てや体系立てについて理解できた。

- サービスラーニング論、アクティブラーニング論など、これまで自分が指導してきたことに理論的裏付けができた。エピソードを挟みながらの話は緊張感が持続できた。時間を守る講義であった。

## ■精神保健福祉援助演習指導概論(演習:90分)

表58 精神保健福祉援助演習指導概論

	人数	%
とても参考になった	8	53.3
まあ参考になった	5	33.3
どちらともいえない	1	6.7
あまり参考にならなかった	0	0.0
全く参考にならなかった	0	0.0
NA	1	6.7
計	15	100.0

### \* 自由記述

- 各養成校における工夫が聞けたので参考になった。
- いろいろな考えが聞けた。
- 演習はモデルのプランがないとはいえ、先生のお人柄と情熱には感動しました。たんとした言葉の中で少し自分の中で整理ができました。
- 援助演習指導概論の枠組みについてももう少し考えてみたかったです。
- シラバスと実習の演習の内容にはズレが生じやすい。見通しと枠組みもきっちり構築しつつ、学生の状況に柔軟に応じていく面も必要であるため、年間計画作成は困難であると感じた。また演習の枠外の様々な取り組みも意見交換できてよかった。
- 多くの時間が取れず残念でしたが、先生に“教員のスーパービジョン”をやっていただきたいです。
- 各学校の先生が苦勞して工夫されていることがわかりました。当事者の人との交流、現場を知ることの大切さを再確認しましたが、ソーシャルワークの価値や視点についてどの様に伝えているのかについて論議をしてみたかったと思います。
- 研修のメリットとして、参加者を知る、情報交換の大切さ、各参加大学の実習や演習につき、セットになっている大学や実習に行かなくても履修可能であり、様々な状況での演習のあり方について知ることができた。
- シラバスについても考慮してつくろうと考えさせられた。
- 具体的な技法、考え方を記した資料を頂け、先生の主張がわかりやすかったです。
- 教材の開発などの具体的な課題が明確になりました。シラバスの交換をすることができなかったのは残念でした。しかし、限られた時間のため仕方がないと思います。
- 他の先生が実施されていることを聞くことができて参考になった。自分の独創的実践も発表、検証することができた。参加者の発言する機会が持たれた。

■精神保健福祉援助演習方法論 I (講義:60 分)

表59 精神保健福祉援助演習方法論 I (講義)

	人数	%
とても参考になった	10	66.7
まあ参考になった	4	26.7
どちらともいえない	1	6.7
あまり参考にならなかった	0	0.0
全く参考にならなかった	0	0.0
NA	0	0.0
計	15	100.0

\* 自由記述

- 先生の経験を踏まえて、演習の工夫が聞けたので参考になった。
- 方法を考える枠組みを考え直すことができた。
- ソーシャルワーカーに求められる要素→自分の中で解釈し、また現場に戻してゆければと思う。
- 先生の援助演習のプログラムやねらい、到達目標などについてお話をうかがうことができ、大変参考になりました。
- 様々な先生が学びを学生が血肉化していけるような様々な工夫をしていることが理解でき楽しかったです。机上の勉学のみでなく、体験型の機会をいかに。
- 先生の演習の全体像と教育（専門職のアイデンティティ）を伺えたことが参考になりました。国の示すシラバス全体をどのように散りばめるかについて、項目として大きく取り上げていなくても含まれているのだろうということがわかりました。
- 個別援助、グループワークの教育方法論ということだったが、具体的な工夫としては、むしろコミュニティワーク的な論議となった。直接援助におけるソーシャルワークの特徴と、それを学生にどう伝えるかについての論議をしたかったと思う。
- 独自の教材の作り方について大変勉強になりました（ボランティア体験からの事例を教材につかう）。是非実践したいと思いました。
- 概論に比べて先生の教育方法論や授業でお使いになっている学生配布レジメについて具体的に講義いただけ、ありがたく思いました。欲を言うと、「ロールプレイ」の進め方等について、実際に先生役と受講生が学生役になって、先生の授業方法を学ぶ意味でロールプレイ実践していただけると、さらに理解が深まるだろうと思いました。座席の配置は、受講生の顔が見える形式にした方が、受講生からももっと活発な意見、体験談を伺えたのではないかと感じました。
- 先生の日頃の講義内容とその中で大切にされているものを具体的に理解することができました。またそこからヒントを非常に沢山いただきました。
- 具体的なポイントを教えて頂き、自分の考えている方向性の確認ができました。
- 評価について考えることができた。新たに評価軸について検討していきたい。
- 参加者の発言する機会が保たれていた。参加者の先生の実践を学ぶことができた。講師はフレキシビリティ（臨機応変）に講義を行っていた。

## ■精神保健福祉援助演習方法論 I (演習: 180 分)

表60 精神保健福祉援助演習方法論 I (演習)

	人数	%
とても参考になった	8	53.3
まあ参考になった	5	33.3
どちらともいえない	1	6.7
あまり参考にならなかった	0	0.0
全く参考にならなかった	0	0.0
NA	1	6.7
計	15	100.0

### \* 自由記述

- 各養成校の取り組みや工夫が聞けた点では参考になったが、議論・情報交換するのであれば体系的なもの、論点があればよりよくなったと思う。又、経験の少ない教員の方のためにも実際に演習をする必要があると思いました。
- 参加者の意見が聞けた。
- いろんなジャンル（大学の方達）の意見・質問から学ぶことも多かった。
- 援助演習の課題が明確になりよかったです。
- 演習内での目標、ゴールをどこに設定するか、評価方法については個々の教員によってまちまちであるように感じた。良い点もあるが、学生が普遍性をもって学べるよう一定程度の共通・統一化も重要と感じた。
- 先生の演習を受けてみたかった点もありましたが、演習についての課題を示して下さった点について大変勉強になりました。
- 実践的な地域援助演習の手法を教えてくださいました。活用させていただきたいと思いましたが、これらの技術を発揮できる場や何のためにやるかを学生にどう伝えるかで悩むところです。
- 各大学の先生から問題提起され、参考になりました。リアリティある授業の必要性を痛感致しました。
- 評価の難しさ、先生を含めて多くの方が感じられていることがわかり、研究者として実施しなければならぬ課題が明確になりました。
- 講習会なのでR Pを行っていただきたかったです。講習会に対する意見は改めて別の時間帯で行うことが良いと思いました。今回の参加者のキャリアから今回R Pが結果的に省かれたのは仕方がないとも理解はしています。



■精神保健福祉援助演習方法論Ⅱ（講義：90分）

表61 精神保健福祉援助演習方法論Ⅱ（講義）

	人数	%
とても参考になった	13	86.7
まあ参考になった	2	13.3
どちらともいえない	0	0.0
あまり参考にならなかった	0	0.0
全く参考にならなかった	0	0.0
NA	0	0.0
計	15	100.0

\* 自由記述

- 具体的なコミュニティワークの教授法を学べてよかった。先生の教授法ですが自分の授業にも応用できるものだった。
- 基本的な考え方が分かりやすく説明された。
- 先生が実践されている演習内容を具体的にご提示いただき、コミュニティワークの演習について具体的にどのように展開するのかをイメージで捉えることができました。柔軟な発想で教材を考えたいと思います。
- やはり学生が主体的かつ具体的体験を通して学んでいくことが何より再重要であることを再認識した。専門家である前に、人間力の向上がそのままSWとしての資質の向上につながるかと考えているため、非常によいと思う。それをしていることで専門的知識も柔軟に応用的に活用（実践）できるようになるため。
- CWを演習に取り入れる工夫は参考になりました。また、先生のSWOT分析を授業に取り入れる方法が演習全体を占めているわけではないと思うので、そこに留意したいと考えます。
- 具体的な演習でSWOT分析が有効であることが理解できた。頭の中を整理し、新しい発見をするために利用したいと思う。
- 講師の前の2大学の実践が演習の授業を通じて地域をかえ、地元の新聞にもその成果が第1面の半分位のスペースをさいて載せられたとの報告に驚きました。かかる授業を少しでも参考にしてこれからの授業に生かせればと思いました。社会資源の考え方も柔軟に考える必要があることを学んだ。
- 「パワーポイントがあれば・・・」と先生がおっしゃっていたので、それを見せていただけなかったことが残念でした。
- コミュニティワークを身近な所から始める必要がよくわかりました。今後の授業計画の参考になりました。
- コミュニティワークの演習における扱い方のヒントを教えて頂けたのが良かった。
- 演習方法について具体例を示していただき、ヒントやアイデアをいただくことができたので、今後授業を展開する上で大変参考になりました。実践的な話が伺えたことはとても貴重なことでした。
- 学生に委員会のメンバーになってもらい、委員（医者、施設長、民生委員等）の役割をやらせるという方法と、学生がその際、実際施設長や民生委員に会って役割を理解する方法、それらは非常に刺激を受けた。その他、ソーシャルアクションなど、実例が多く、参考になった。

## ■精神保健福祉援助演習方法論Ⅱ(演習:90分)

表62 精神保健福祉援助演習方法論Ⅱ(演習)

	人数	%
とても参考になった	14	93.3
まあ参考になった	1	6.7
どちらともいえない	0	0.0
あまり参考にならなかった	0	0.0
全く参考にならなかった	0	0.0
NA	0	0.0
計	15	100.0

### \* 自由記述

- SWOT分析の概要を学べたことがよかった。できれば、最後の分析まで到達できるとよりよかったと思います。
- 具体的にどのように行うのかがイメージできた。活用してみたい。
- SWOTの分析シートはもう少し時間がほしかったが、事例から発展してとても勉強になりました。
- コミュニティワークをどのように演習に組み込んでいけばよいかよくわかりました。大変参考になりました。
- SWOT分析を実際に体験できたことで、どのように使うのかが理解できました。と同時にSWOT分析自身を学びなおさねばと感じました。
- SWOTのことは知っていたが、コミュニティワークのアセスメントに非常に有効であることを再認識した。
- 一つの技法として学びました。おもしろいです。ただし、CW演習方法、教材の全てではないので、一例として少し学びたいと思います。事例研究の中に取り入れられる所を入れたいです。
- 教材の事例1についてSWOT分析をやってください、大変すばらしい手法と思いました。CW、GWからCWにつなげての分析で援助技術の総まとめという性格の演習と思いました。私も及ばずながら、地域福祉研究会を学生、地域、大学と協働して2年位やった体験や最近では子どもの虐待、いじめ問題と地域の学生からのトークと保護者からの対応のイベントも体験しており、授業を通じても生かしていければと思いました。
- SWOT分析の意味と難しさがよくわかりました。自分の勉強不足を痛感しました。
- SWOTを体験する機会を得られた。しかし今後、SWOTをどこまで教員が理解して学生に伝えられるか。
- SWOT分析は全体(全部)を理解し、自分のものとして利用することは難しいと感じた。

■精神保健福祉援助演習方法論Ⅲ(講義:60分)

表63 精神保健福祉援助演習方法論Ⅲ(講義)

	人数	%
とても参考になった	10	66.7
まあ参考になった	2	13.3
どちらともいえない	2	13.3
あまり参考にならなかった	0	0.0
全く参考にならなかった	0	0.0
NA	1	6.7
計	15	100.0

\* 自由記述

- 先生のオリジナルモデルが聞いて参考になった。一貫してストレングス視点のアプローチが聞いたのもよかったです。活きたPPTも理解しやすいものでした。
- ヒントが一杯あってよかった。オリジナルのツールがよい。
- 100ストレングスマップ、ミスポジションモデルなど深い内容で授業にも生かせると思う。切りバリなど又音楽など取り入れて楽しく演習してゆきたい。
- ミスポジションモデルは新鮮でした。ズレの中で生じたものをニーズとして捉えることで、より本人の望むありたい自分になるための支援につながる気がします。リフレーミングの視点はとても重要だと感じ、リフレーミングのワークを取り入れていますが、本日改めてリフレーミングを技術として身につけることの重要性を感じることができました。
- 根本的な重要事項を整理してくれて、わかりやすい内容であった。核となる視点は共感でき素晴らしいが、個人的にはストレングスのみが強調されると勘違いする学生が生じかねないため、留意を要すると考える。Weakness な部分もきちんとアセスメントしつつ、それすらもストレングスにかえていく力を養っていかなければ、専門家としての責務は全うできないと考える。
- 技法を伝えて下さったのだと理解致します。先生の実践を概要ではありますが伺えたことは、研究として考えてみたいと思います。(ケアマネジメント概論の講義がこのコマの目的だったのででしょうか？学生に各論の上で演習として何を伝えるのかを講義されるのかと思っていました。内容への不満ではなく、受講の心構えができていませんでした。)
- とてもわかりやすく説明して下さいました。ケアマネジメントとソーシャルワークの区別をどう学生に教えるかが課題(リハビリとソーシャルワークの関係も同じ)だと思います。
- ストレングスの意味するところの理解の仕方について、現在を肯定し、生きていること自体が素晴らしいとの視点に立つことが大切であること。リフレーミングの手法やICFの視点の大切さも理解できた。ただ、このような考え方に立つと社会資源の整備も進まなくなるのではと感じた。
- 利用者理解の演習において、ストレングスモデルやミスポジションモデルの重要性に気づけた。
- PPTの作り方や模造紙の使い方の効果が明らかになりました。また、その奥にどのような対象も援助技術の対象となることがよくわかりました。
- 演習にとどまらず実践する上で必要で大切な視点をどのように学生と共有するかという点を教えていただきました。
- マネジメントを学ぶポイントを整理することができた。

■精神保健福祉援助演習方法論Ⅲ(演習:180分)

表64 精神保健福祉援助演習方法論Ⅲ(演習)

	人数	%
とても参考になった	10	66.7
まあ参考になった	0	0.0
どちらともいえない	0	0.0
あまり参考にならなかった	0	0.0
全く参考にならなかった	0	0.0
NA	5	33.3
計	15	100.0

\* 自由記述

- 具体的な演習課題だったので、即授業に使えるものでした。そろそろ疲れてきたのですが、楽しく課題に取り組むことができました。
- 具体的なワークで楽しめた。
- リフレーミングの演習(ワーク3題)はとても参考になりました。さっそく授業にも利用してみようと思っています。
- 具体的なプログラムを提示していただき、大変参考になりました。
- やわらか頭になるワークを体験して、授業で使いたいと思いました。このワークを通して学生の幅広い物の見方の体得を支援する方法論のヒントをいただきました。
- ストレngthス、リフレーミングなど柔軟で多面的な視点を見出していく思考能力は信念(スピリッツ)と共に最重要であるので非常によかったです。
- 基本的で具体的な演習ネタと参加者の意見が参考になりました。どこかで使います。使えます。
- ストレngthスの考え方、視点がとても参考になりました。とても明るい世界観だと思います。ストレngthスは、関係を基本とする点、変化を成長を重視する点で、とてもソーシャルワーク的だと思います。リフレーミングも“関係”を基盤にしなければ意味が減るかもしれません。
- 物事をポジティブに考えることの大切さを学んだ。ICFモデルやリフレーミング手法はストレngthスは社会資源というラップ氏の7原則につながっている。ただ、ストレngthスの強調だけでなく、weaknessにも配慮し、SWOT分析手法によるweakness→ストレngthスに変換していくソーシャルアクションも必要と私としては思いました。
- 具体的で参考になりました。
- 演習の授業展開方法を演習方式で行って下さったことが良かった。
- 具体的なワークができて楽しかったです。
- 休憩をはさむとさらによかったです。

## ⑫演習の講習に取り入れた方がいいと思う内容

- 演習、講義、ディスカッションなど様々なメニューであることは好ましいですが、めりはりがあればよりよいものになると思います。
- システム、プログラム、手法の開発も重要ではあるが、最終的には学生の特性も活かしていく教員個々の力量が問われる点もあるため、教員のスキル、資質についてもメスを入れていくべき。
- ①教授法と教材、②様々な技術習得、③教員スーパービジョン（ぐち？テーマの決まったピアグループワーク？）、大きく目的を変えて研修を行って頂けたらと思います。通信課程での演習展開についての議論もして下さい。
- ケアマネジメントにつき、ソーシャルワークの視点とケアマネジメント機関とでの違いもあるので両面からの演習もあればと思いました。
- IMR、WRAPといったリハビリテーション技法の教育現場への導入のあり方について議論してほしい。
- 演習は学生にわかりやすく、その目標達成をいかに行うかが難しいので、学生への提示の仕方など、もう少し演習方式、ロールプレイを多くしていただくと良いなと思いました。
- 教育の方法論は特に現場経験からきた新米の教員に対しては必要だと思います。
- 質（教員の）を均一にするのであれば、RPも少しは取り入れた方がいいと思います（なじみの薄い教員がいる可能性を考えて）。
- SWOT、方法論Ⅲの演習。

## ⑬今後の本格実施をめざすにあたっての意見、要望

- 今日の演習は2日間の日程ですが、よく練られたもので貴重な経験をさせていただきました。事務局の方々に感謝致します。心よりお礼を申し上げます。来年度からの研修もよろしくをお願いします。
- たくさんの内容で不消化ですが刺激になりました。本当にありがとうございました。
- 4年次に援助演習・実習をおこなうケースや3年次援助演習・実習というケースでは援助演習の内容や位置づけは変わってくると思うので、そのあたりをどのようにしていけばよいかご指導いただけましたら嬉しく思います。
- 社会福祉士の講習は国が方針を示してこられた部分もありますし、なにより有資格者でない教員、専門を福祉におかない教員（質の保証）研修をやらなければなりません。参加者間のうわさで「PSW教員研修はやらない」と理事会が言っていると広まっていました。どうなのでしょう。又、全体として研修の意味が広がっていました。ニーズがバラバラだからです。できれば、そのニーズに応える研修と、国からの要請とは区別して頂ければと思いました。
- 社会福祉士の研修との違いを明確にした方がよろしいかと思います。ただ、病院、診療所に特化せず、社会復帰施設（障害者自立支援法の改正を踏まえ）についても実習先になっているので、対象施設にしていいただければ幸いです。障がい者権利条約との関係もご指導くださればと思います。
- 良い演習の授業を展開しようと思えば、教室や時間といった枠を乗り越える工夫を教員が考えなければならないと感じた。本日の講師のシラバスなども参考にさせていただけると授業の組み立てにも大変役に立つと思う。

- 演習で使用する際に有効な教材（視聴覚教材を含む）等も数多く例示して頂きたく思いました。持参したテキストをほとんど使用しなかったが、これらをどのように使用したら、というヒント（助言）も頂きたく思った。
- 演習の時間、特にグループワークで話し合う時間が必要と思います。また教員歴によって分けた方が良いのかもしれないと思います。
- 今回くらいの人数がやり易いと思いますので、授業と同じように20名以下で1グループとして欲しい。はやり、やり取りや意見交換が充分できる形態がいいです。
- 参加者の実践や意見、質問を出し合う時間があり、活発な発言が見られたのがとても良かった。講師の先生方も適任であったと思う。

## (2) 精神保健福祉援助実習講習会受講者へのアンケート結果

### ①参加人数:13名

### ②年齢

表65 参加者の年齢

	人数	%
20歳代	0	0.0
30歳代	3	23.1
40歳代	2	15.4
50歳代	5	38.5
60歳代	2	15.4
70歳代以上	0	0.0
NA	1	7.7
計	13	100.0

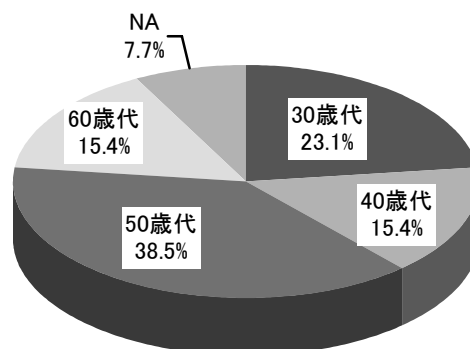


図12 参加者の年齢

### ③性別

表66 参加者の性別

	人数	%
女	9	69.2
男	4	30.8
計	13	100.0

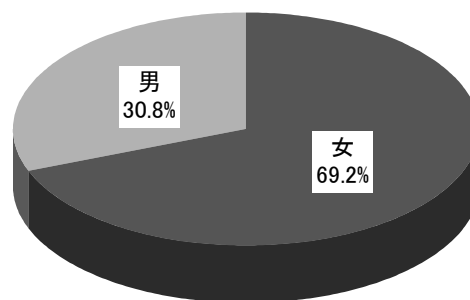


図13 参加者の性別

④精神保健福祉士国家資格の有無

表67 国家資格の有無

	人数	%
有	11	84.6
無	2	15.4
計	13	100.0

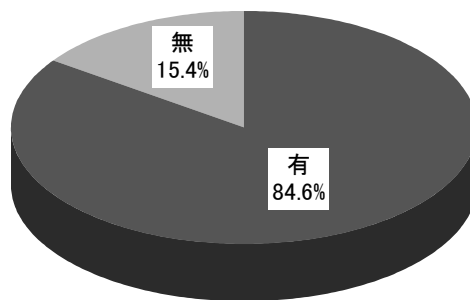


図14 国家資格の有無

⑤資格が有ると答えた人の現場経験の有無と年数

表68 現場経験の有無

	人数	%
有	9	81.8
無	2	18.2
計	11	100.0

\*現場経験の年数：平均 190.4 か月（最長 408 か月、最小 24 か月）

⑥専任教員になってからの年数 平均 88.0 か月（最長 192 か月、最小 11 か月）

⑦精神保健福祉援助実習の担当をしているか否か

表69 実習担当の有無

	人数	%
担当している	10	76.9
担当していない	2	15.4
NA	1	7.7
計	13	100.0

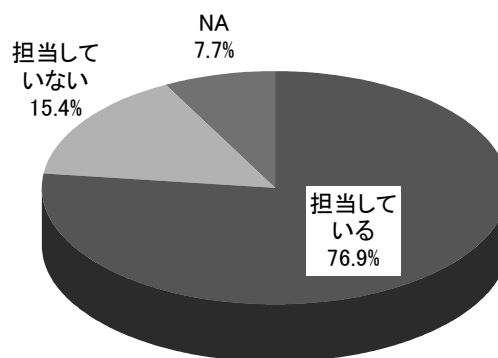


図15 実習担当の有無

\*実習を担当してからの年数（無回答 1 名）：  
平均 67.8 か月（最大 144 か月、最小 10 か月）

⑧参加した動機（複数回答）

表70 参加動機

	人数
自分の研鑽のため	10
職場からの勧め	3
知人等からのすすめ	0
その他	1

⑨開催時期について

表71 開催時期

	人数	%
この時期でよい	8	61.5
その他	5	38.5
計	13	100.0

\*その他の意見

- ・実習のない時期、春休み中に実施する
- ・夏（実習訪問は個人の融通がきくので）の方が良い

⑩開催場所についてどう思いますか

表72 開催場所

	人数	%
便利	8	61.5
まあ便利	3	23.1
普通	1	7.7
やや不便	1	7.7
不便	0	0.0
計	13	100.0

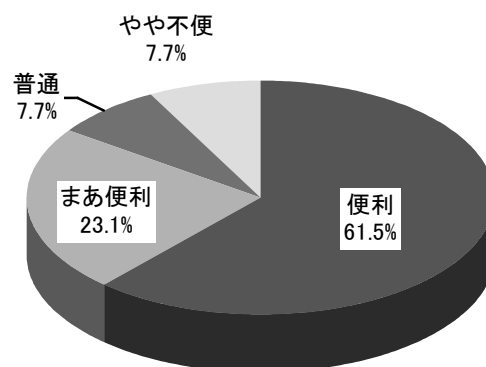


図16 開催場所



## ⑪実習の講習内容に関する意見

### ■精神保健福祉援助実習指導概論(講義:60分)

表73 精神保健福祉援助実習指導概論(講義)

	人数	%
とても参考になった	5	38.5
まあ参考になった	8	61.5
どちらともいえない	0	0.0
あまり参考にならなかった	0	0.0
全く参考にならなかった	0	0.0
NA	0	0.0
計	13	100.0

#### \* 自由記述

- 全国のレベルがわかった点が大変良かった。専門職と「教授」とのアイデンティティ、モラトリアムの状況があることでP SW養成の状況を明示していると思われる。
- 講習会参加者が所属する各大学の実習指導プログラムの概要をうかがえたことはとても参考になりました。
- 具体的なお話をうかがうことができ参考になりました。また先生の話し方がイメージと違い、安心しました。
- 実習の制度変更の状況の説明がなされてよかった。
- 具体例をもとに話をされて理解しやすかったが、あり方検討会の議論を踏まえての話である方が身になる話として受け止められる。
- グループでテーマを決めて発表する報告会はおもしろいと思った。学生の実習での学びをどう深めるか？実習後の取り組みが重要であると思う。
- 本務校での実習指導の実際について概論的にご講義頂き、共感する部分も多く（実習先との関係でのトラブル、実習中止例など）、自分の行っている実習指導と比べながら受講し、振り返りと今後へつながる内容であり、少し安心することができた。
- 自分の所以外でのしっかりした流れを伺えたことがよかった。
- この科目だけでは収まりきらない感じを強くした。

■精神保健福祉援助実習指導概論(演習:90分)

表74 精神保健福祉援助実習指導概論(演習)

	人数	%
とても参考になった	3	23.1
まあ参考になった	9	69.2
どちらともいえない	0	0.0
あまり参考にならなかった	1	7.7
全く参考にならなかった	0	0.0
NA	0	0.0
計	13	100.0

\* 自由記述

- 他の施設が工夫されていることもわかりました。
- 実習報告会の実施曜日ややり方、実習報告書を施設に送っていない経緯。
- シラバスについて演習、実習の連動性を踏まえた各校独自の工夫について、もっと引き出して欲しい。
- 先生方の様々な工夫を聴くことができ、参考になった。
- 理想のシラバス作成にあたり、現実との制約を感じつつも今後への糸口となった。良い機会となった。各校実習指導の担当教員の発言には具体的なヒントを得ることができた。学年を超えての(3~4年)合同授業や先輩の講話による学生への動機づけになること、課題進行の涵養の大切さなど、改めて考えさせられた。
- 貴重な時間を個人ワークで使うのはもったいないと感じた。自己紹介が無意味に長い方がいたのが残念。1つのポイントでの自己紹介、又は所属と名前のみで他のことはグループワークの中での話し合いにもって行ってほしい。
- 事前実習計画表の作成はむづかしかったが工夫してやってみます。モデルプランを示していただくとなおよかったです。
- 「理想的なシラバス」の演習は新鮮でした。通常は学生の顔を思い浮かべながら学生の力量に合わせてシラバスを作ってしまうので「理想的」の発想が抜けていました。視点をいただけて、ありがたかったです。ただ、皆さんの書かれたシラバスを拝見できればなおよかったと思います。何らかでフィードバックをお願いいたします。
- 他の先生がどのようなとり組みをされているのかが分かった。

■精神保健福祉援助実習指導論 I (講義:60 分)

表75 精神保健福祉援助実習指導論 I (講義)

	人数	%
とても参考になった	6	46.2
まあ参考になった	6	46.2
どちらともいえない	1	7.7
あまり参考にならなかった	0	0.0
全く参考にならなかった	0	0.0
NA	0	0.0
計	13	100.0

\* 自由記述

- P S W教員の必須のものが明確化されず、大変残念であった。しかし、精養協の地方版研修と言った感じがあったので、「輪」を全国研修教員講師でも教授することが難しいと知ることができたことは全国の研修に時間を使って来たことはあった。
- 講師の先生の大学での実習指導方法を伺えた(学べた)ことは勉強になりましたが、午前中の指導概論との内容の違い、講義の目的の相違がわかりにくかったです。
- 先生が実際にされている工夫を伺うことができました。
- 講師の先生のシラバス、実習日誌を素材に各大学の意見交換ができ、大変勉強になった。
- 具体的でよかったが、各校の置かれた状況の中で動いている話なので参考にはなったが、あり方検討会の 11 月案を踏まえたモデル案の提示となるような取り組みの方が良いような気がする。
- 現在は全ての学生を病院に 25 日間出しているが、今後学生増も予想され、施設実習も考えなければならぬだろうと思っている。施設で学ぶこと、学べることも多いと思う。施設実習と病院実習を組み合わせることで効果的な実習をいかに組み立てるかが課題だと思った。
- 事前の実習がいくつも行われる仕組みが学科として出来上がっていること。事前に現場講師の話を何回も聞けるようシラバスに組み込まれていること、先輩を現場講師として複数回位置づけていることなど、講師の実習担当の実践を具体的体系的にお示し頂き、大変参考になった。
- 自分の所以外でのしっかりした流れを伺えたことがよかった。
- 精神保健福祉実習の予定表は参考になりましたが、実習時間を多くとる方法もあるのだと、学生の成長にはよいのかと学科へもちかえって話し合います。
- 実習途中のふり返しシートが参考になりました。実習終了後の自己評価はしていましたが、実習の途中で具体的な項目について自己評価することで現状が明確になり、具体的な課題に気づけると思いました。
- 具体的なとりくみが分かった。新しい視点があった。

■精神保健福祉援助実習指導方法論 I (演習:180 分)

表76 精神保健福祉援助実習指導方法論 I (演習)

	人数	%
とても参考になった	6	46.2
まあ参考になった	7	53.8
どちらともいえない	0	0.0
あまり参考にならなかった	0	0.0
全く参考にならなかった	0	0.0
NA	0	0.0
計	13	100.0

\* 自由記述

- 精養協の地方で行っている、いつもの「グループワーク」であった。テーマ設定、ワーク用プログラムがないので方法論が確立されていないことがわかり、大変有益であった。講師が資格要件ギリギリというので方法論が提示できないこと、また担当施設の P S W のコアコンセプトなどが門下確立されていない上での講義・演習であったか、実務がない自分であるが、これまでの実習教育プログラムに大変大きな自信となり参考となった。
- 講師の先生は授業開始時には「障害者自立支援法に基づく実習指導について講義します」とおっしゃったように思いましたが、ここで話された内容は実習施設の確保から巡回指導までの一連の流れの確認と評価方法についてであり、学生を前にした指導方法論のポイントがよくわからなかった。経験 5 年以内の教員も対象に研修会の開催を考えている場合、方法論 I ～ III の講義は内容が抽象的であるように感じた。
- 他の大学の状況がわかりました。演習でもですが、評価の基準作りの難しさを改めて実感しました。
- 施設評価、大学の実習評価の標準化の意見交換は大変参考になった。施設評価と自己評価の比較、実習日誌や報告会で言えなかったこと、言いたかったこと等検証する機会をつくり、ふり返ることの重要さの報告は大変参考になった。
- 実習指導で抱えている悩みを共有することができ、また具体的な対応例もうかがうことができて参考になった。
- 受講者の方々から自然に多様な質問が出、また講師、受講者から多様な実習担当の現状・対応について意見が出されたことにより、いろいろと考えさせられた。実習ガイドライン(評価のガイドラインを含む)について P 協会と養成校との連携が県単位でも大切な課題となること、全国としても基準を確認し合うことの大切さを感じた。
- 難しい人数。1 つのグループでの話し合いには多すぎるのか、語っていない方にも思いがあったのでは? そうした思いを引き出せるスキルを使っていたいただいたグループワークだともっと良いのでは? 私自身には良かったです。
- 各大学の実習指導のやり方、良い方法は(学生にとって)活発なディスカッションから学ぶことが多かった。
- 実習指導についての様々なとりくみをうかがえて参考になりました。地域のとり組みをうかがって地域の養成機関、P S W 協会との連携の必要性を改めて感じました。
- 評価について考えが聞けた。

■精神保健福祉援助実習指導論Ⅱ(講義:60分)

表77 精神保健福祉援助実習指導論Ⅱ(講義)

	人数	%
とても参考になった	11	84.6
まあ参考になった	1	7.7
どちらともいえない	0	0.0
あまり参考にならなかった	0	0.0
全く参考にならなかった	0	0.0
NA	1	7.7
計	13	100.0

\* 自由記述

- 病院の実習計画について学ぶことができた。
- 学校や学生の事例を挙げながら、講師の先生がご所属なさる学校での実習指導の流れや方法論を話して下さったので方法論Ⅰ以上に実習指導方法について具体的にイメージできました。
- 非常にわかりやすく、本学でも是非参考にしたいものがちりばめられていました。
- 精神科病院、診療科に限定することはないことが分かった。実習生と実習先との距離の問題、共感することの評価の問題(クライアントの話に涙ぐむことの事例から)、巡回指導の時期(2回行くことのメリット)、SWの帰校日との関連、学生の自己評価と施設評価のズレに関してのふり返りの大切さを知った。
- 記録書式を示していただいたのはありがたい。グループワークやコミュニティワークの記録は本学では作成していないが、記録様式があると学生も取り組みやすいだろうと思う。
- 実習生、実習担当者と協働作業でどう養成校の実習担当教員として関わっていくのか、実習担当教員の役割について再確認できた。実習生に対してのみならず、実習担当者に対しても伝えていくこと、連携することの大切さに気づけた。実習指導のカリキュラム、巡回、評価、記録の工夫点が示され参考になった。指導に具体性を持たせることの重要性に気づけた。
- 事前→実習→事後の流れの再確認ができた。具体的でわかりやすかったです。質問時間がほしかったです。
- 医療機関における実習教育の指導のあり方がよく学べた。
- 実習の目標と課題も学生が実習指導者に自分を伝えるツールという視点がこれまで弱かったなあと感じました。そんな風にとらえると学生自身もやっつけ仕事ではなく、自分自身を知ってもらうためにとり組めると思うので、この視点をいただきます。
- 資料と説明が分かりやすかった。

■精神保健福祉援助実習指導方法論Ⅱ(演習:90分)

表78 精神保健福祉援助実習指導方法論Ⅱ(演習)

	人数	%
とても参考になった	10	76.9
まあ参考になった	2	15.4
どちらともいえない	0	0.0
あまり参考にならなかった	0	0.0
全く参考にならなかった	0	0.0
NA	1	7.7
計	13	100.0

\* 自由記述

- 病院の実習計画についての実習教員の考え方の実際を知ることができた。
- 演習方式による事例検討を3パターン(種類)行いましたが、どれも参考(勉強)になりました。時間が足りなかったことが残念でした。この内容での演習を行うには、あと30分延長しても良いのではないかと思います。グループ分けも教員のキャリア、経験年数を考慮してバランスよく設定するとグループの中で各自(参加者)が意見を伝えやすいし、互いに学びあうことも増える?のではないだろうかと思いました。
- グループワークと報告をする中で他の教員の考え方や自分自身の傾向を気づくことができました。
- 実習の目標と課題の演習は大変参考になった。
- グループワークや実習で学生に何を学んでほしいか?という実習教育におけるベースの部分を改めて考えることができた。もう少し、時間が長ければもっと深めることができたと思う。
- 実習計画書作成指導について他の養成教員とグループで演習を行うことにより、より多角的なテーマと課題の可能性を探ることができた。ストレングスモデルに基づくエンパワメントとリフレーミングの大切さを再確認できた。事後指導の学生への声かけ内容のポイントについても貴重なグループワークとなり、多様な意見を持ち帰って今後の事後指導に活かせるものとなった。
- 意識せずにやっている「学生指導」の位置づけが自身にできた。
- (5)の事例からのディスカッション、事前事後指導で学生のフォローに困っていたので参考になりました。
- 他の先生方の実習指導に対する考え方、進め方、思いをうかがえて参考になりました。
- 指導時の異なる視点がわかった。

■精神保健福祉援助実習指導論Ⅲ(講義:120分)…日本精神保健福祉士協会と共催

表79 精神保健福祉援助実習指導論Ⅲ(講義)

	人数	%
とても参考になった	6	46.2
まあ参考になった	5	38.5
どちらともいえない	0	0.0
あまり参考にならなかった	0	0.0
全く参考にならなかった	1	7.7
NA	1	7.7
計	13	100.0

\* 自由記述

- 受け入れ側(実習指導者)のお話であり、精養協、実習巡回で地域ブロックの特性にあわせて既知のことである。予算の都合で共催であるのであればやむを得ないと思って。また資格要件の研修時は受け入れ側の話を聞くと「ブレ」が生じ、実習生を実習施設に送りにくくなることも考えられる。
- 実習指導の方法について具体的に話して下さり、実習施設が実習生をどのように受け止めて指導下さっているのかがよくわかりました。しかし今日の話は1施設の現状報告 or P S Wの思いであると思えるので、実習指導マニュアル等をテキスト以外に作成し、大学(養成校)と実習施設との共通認識を行えるような工夫(努力)が必要だと感じました。
- 実習現場における色々な事例を伺うことができました。ただ、日本P S W協会の流れの中での話はわかりにくかったです。
- 医療機関における実習指導者、施設実習からの報告で業務分類等を利用し、整理し、職能評価制度が大切なことと教員実習担当としても必要なことと思いました(P S Wとして専門家としてではない業務実態を実習生に伝える)。
- 現場の指導者の熱心な実習指導に応えることのできる実習生を送り出すことは難しい。指導者が熱心であればあるほど、実習生とのミスマッチがおこり、指導者、実習生、教員それぞれが苦しむことがある。そうならないために指導者と教員が共通の認識(実習で何をどこまで学ぶのか?方法は?等)を持つておくことが必要だろうと思う。
- 実習生、他職種への説明責任の重要性、養成校から実習生、実習先への実習依頼内容の説明責任について考えさせられました。とても丁寧な関わりをされている実習指導の実践に頭の下がる思いでした。病院から地域に職場が移ったことによるワーカーとしての業務について、より専門職として考えさせられた。
- 実習指導者の立場からの話が聞けたことはよかった。とてもわかりやすくよかったです。現場のジレンマが伝わりました。
- 実習指導者のあつい思いがうけとめられた。実習指導者と教員と(学生中心に)すり合わせが必要と思った。実際の職場場面が面白かった(実習前→服装、髪の毛の色など)。
- 実習指導者が実習において何を大切にしているのか、また実習生に何を求めているのか、養成校に(教員に)何を求めているのかについて情報が得られたので有効だった。
- 現場の考えが分かった。

■精神保健福祉援助実習指導方法論Ⅲ(演習:100分) …日本精神保健福祉士協会と共催

表80 精神保健福祉援助実習指導方法論Ⅲ(演習)

	人数	%
とても参考になった	4	30.8
まあ参考になった	5	38.5
どちらともいえない	1	7.7
あまり参考にならなかった	0	0.0
全く参考にならなかった	0	0.0
NA	3	23.1
計	13	100.0

\* 自由記述

- 各養成校の状況と課題について明確になったので大変良かった。
- 精養協のみのグループでP協会との交流もしてほしいと思いました。ただ、精養協のグループで情報を沢山いただきました。
- Aグループとして発表する。テーマとして「理想の連携のあり方を模索する」とし、①守秘義務について施設と養成校との共有化（施設評価票、個人票）、②実習フィードバックの確立（報告会内容）、③実習形態の改善（地域※週1実習等）、④巡回指導、実習計画のすり直し等。
- 2日間のプログラムのまとめの場として良いディスカッションになったと思う。指導者と教員が直接ディスカッションすることができればもっと良かったと思う。
- コミュニケーションのとれない学生を育てていく育てる実習に向けて実習指導者が取り組んでいることへの感銘。学生への指導に具体性を持たせる。連携のあり方・巡回指導職務分析・守秘義務…実習記録を外に持ち出す問題、報告書原稿を事前に施設にお伺いを立てる・フィードバック…評価票、学生への開示・実習形態…地域統合型※施設に基づく週1回実習→ガイドラインへの配慮、などの意見が出たので今後に活かしたいと思った。
- 抽象論になってしまった。当然のことながら結論は出ないが、やや不全感あり。ポイントが絞れないことがメリットでありデメリットであるかな。発表は完結に！
- 実習指導者側と教員側とグループをわける時に、教員だけとか指導者だけのグループ分けでなくてミックスした形でディスカッションができればもっと良かったと思う（せっかくの機会なのでもったいないと感じた）。
- 多様な意見が聞けた。



## ⑫実習の講習に取り入れた方がいいと思う内容

- ①チームワーク、医療機関の特性を考えると、医師、看護師長（部長）など他の専門職が入っていた方が良く思われる。例えば、看護協会ではその道のスペシャリストが講師に入った方が良く。精神科看護、CNSも専門特化している。②精神科病院での実習適応過程、および患者の入院適応過程などがあるとPSWの患者への実習生の働きかけも明確化されると思われる。
- できればですが、社会人学生に対する実習教育について取り上げていただけると大変助かります。実習指導者研修に参加された方との交流があると意見交換等ができよいかと思います。よろしくご検討下さい。
- 指導概論と指導論は講義内容が重複している部分が多かったように思いました。大切な部分であることは理解できますが、教員として学生に質の高い演習を目指して困っている（障害となっている）ことは「指導概論における理論を念頭に、どのように授業していくか」ではないかと思います。そこで演習の時間を2倍くらいに延長してほしいと思いました。講習の最後に演習で得たものを発見して報告しあい、理論と結び付けていく方法でも良いのではないかと思いました。
- シラバスの点検や事後指導について、特に実習報告会の持ち方についてのグループワークが必要と思いました。またP協会との合同グループワークは必要だと思います。ただ、その際は前の講義で両方の立場からの発言が必要と考えました。
- 今回のモデル講習会に取り入れられていた実習指導施設指導者からの報告を踏まえた講習並びに双方の交流会を継続して頂ければと思います（PSW協会との合同企画で）。
- この講習が実習教育における理念、哲学において養成校が一定のレベルの共通認識を持つ場となれば良いと思う。その上で、それぞれの養成校で特徴のある実習教育をすべき。この講習は実習教育のナショナルミニマムを確認することとプラスαのヒントをもらえることという2つの意味があると思う。
- ・実習マネジメント・大学の場合の1年次からの積み上げ実習教育を含めた実習教育の体系化、全体像をつかむ（養成校による多様な可能性）・事前指導（実習計画の立て方をどう指導するか）・実習巡回中の留意点・事後指導（実習生がやれたことへのエンパワメント）・リスクマネジメント・評価方法の例・実習指導者との連携・実習指導者への支援（実習指導者へのSV）。
- GW、意見交換は異なった視点を得る意味で是非取り入れるとよいと思いました。

## ⑬今後の本格実施をめざすにあたっての意見、要望

- 予算や人材がない中で大変ご苦労されていることが伝わってきます。しかし、それぞれの所属団体の利益、メンバーのあり方と「教員（教授）」養成は教育者としてのアイデンティティを持ち、職能団体と一線を持てる「士」がする必要があると思います。社養協はそのような棲み分けが、その設立経緯からもあります。本格実施は予算があると思うので。教育者と実習指導者の距離がないと実習生はその関係にまきこまれて本来の実習が難しくなると思います。連携は大事だと思いますが、兼務は「村社会」的な構造となるように思います。
- 社会情勢は日々変化するので実習指導や演習についての研修は養成校協会、P協会でも年1回以上開催して養成校（の教員）には研修参加を義務付けてほしいと思いました。

- 実習の授業自体は大学により特色があります。その中での共通基盤、特に評価のあり方についてはある程度の基準は必要だと考えました。本当にありがとうございました。
- 障害者自立支援法、高齢者医療確保法（65歳以上の障害者も原則適用）や障害者権利条約と国内法整備の動向も踏まえたカリキュラム改革をお願いします。退院支援や就労支援の動きの中で病院や診療所実習に特化しがちなものでなく、地域支援、スクールソーシャルワーカー、独立型精神保健福祉士等への実習対応への配慮がなされればと思います。
- とても有意義な2日間でした。ありがとうございました。講師の先生方がそれぞれの“手の内”を見せて下さったことで多くのヒントをいただきました。
- 実習生、実習担当者への支援を継続して行うには教員自身のエンパワメントシステムが必要になる。教員を支える仕組み（演習・実習の基準、教員同士のピアサポート、実習指導者との協働、大学内での実習担当の位置づけ（例えば専任配置、授業コマ数の配慮、他の学内業務と重ならない配慮、SWの基準））。
- 社福は4日間でしたが、やはりそのくらいの日数は必要なのかなとも感じています。
- 毎回バラバラに資料を渡すのではなく、最初の日にまとめて冊子（1冊のもの）として作成したものをわたしてほしい。もう少し準備をちゃんとしてほしい。（工事中の校舎とか…他）4日間ありがとうございました。

### (3) 精神保健福祉援助演習のモデル講習に関する講師アンケート結果

#### ①講習を行うにあたって、心がけたこと、工夫された点

- カリキュラム改正が決定されていない中、その講義範囲の設定を出来る限り検討会での論点に近づけながら、レジュメ作成を試みた。
- 精神保健福祉士や教員としての経験の差異を前提に考え、演習の基本的な枠組みを中心に伝えるようにした。
- コミュニティワーク演習のおもしろさ、ダイナミクス、基本のエッセンスを理解してもらうこと。とくにSWOT分析を用いた地域アセスメントの技法を焦点に演習を行った。
- 「方法論Ⅲ（ケアマネジメント）」の目的・内容を伺っていなかったもので、どう展開するか大変悩んだ。
- 自分なりに従来の「援助技術各論テキスト」と「援助演習テキスト」との関係も配慮し、新たに付け足すほうがよいところに着目し、演習ネタを3つ用意した。
- 全体的には現行の障がい施策（3障がい）の中で現場が動いているところに考慮した。
- 内容的には精神保健福祉士の「姿勢」、「スキル」を中心に置いた。
- 「精神保健福祉援助演習」の担当経験年数が少ない受講者に対しては、短い時間内で理解が深まるよう、できるだけ抽象度を下げ、講義の中身を具体的にイメージしやすくなるよう心がけた。
- 配布物もできるだけわかりやすい内容であること、そしてボリュームも多くなりすぎないように注意した（受講者を圧倒しないこと、情報過多で「溺れた感じ」を抱かせないこと等）。
- 「精神保健福祉援助演習」の教授方法は特殊であり難しい側面もあるので、何に気をつけないければならないのか、何を伝えるべきであるのかなどをしっかりとメッセージに組み込んでいくこと。

- 「精神保健福祉援助演習」のもつ固有の楽しさや高い教育効果にも気づけるように配慮すること。
- 準備してきたことにとらわれず、受講者の反応をよく見て、臨機応変に内容や時間配分を変えることによって、多様なニーズに応えられるようにすること。

## ②講習で、最も伝えたかったこと

- 担当が概論であったため、①教育カリキュラムにおける演習の位置づけと②シラバス作成の考え方および③教材活用の留意点の3つである。特に、体験学習理論とグループワーク技法が欠かせない点を伝えるようにした。
- 体験がないこと、テキスト不足で教えられる、自信がないと考えている教員が多いと思われるが、十分教えることができる演習であることを学んでいただきたい。
- 「利用者本人の車（思い）」に乗って、目的地に向かうための姿勢やスキルを習得すること。
- 演習としては、現行では「技術演習」のスキルと時間がとても足りないこと（従来のスタイルは理論からいきなり事例演習に入るが、そのつなぎをする技術演習が大事と思う）。
- 「リフレーミング」の技術演習、長期目標設定に関する課題の技術演習など。
- テキストなどで提示されている科目の目的を、自分なりに咀嚼し、理解したうえで授業に臨むことが必要であるということ。わかった気になって授業をしないこと。
- 講師の授業内容を公開することで、そこから自分なりの新たな教授方法を構築していくこと。最初は模倣でも、それを自分でアレンジし、新たな教授を生み出していく必要性。
- 「ロールプレイ」「ゲストスピーカー」「体験学習」「事例検討」など、内容はほぼ同じであろうが、教員ごとにそのやり方や工夫している点、ねらいどころは違っているということ。
- 現場での経験主義を振りかざしての教育はしてはならないこと。
- 現場経験を有する教員が教える場合、その経験が教育に活かされる場合と、かえって支障となる場合があるということ。
- 教員は、自身の経験を教育の場面で活かす方法について、常に模索しつづける必要があり、経験則だけで授業を展開してはならないこと。常に、授業の質と効果の向上に常に努めていかなければならないということ。
- F Dの場を継続的に確保していく必要性。
- 「精神保健福祉援助演習」はF Dを必要とすると思う。フォーマルなF Dダケデナク、仲間同士での授業の公開と相互評価、高校福祉科教諭との授業公開と相互評価の場など、多様な学びの機会を自ら生み出し、活用していく必要性。

## ③受講者の反応

まあ理解してくれた	3名
どちらともいえない	1名

#### ④③の回答についてその理由

- 精神保健福祉士や教員としての経験の差異が大きく、経験が豊富な受講者は自らの実践例を語る機会となり、経験の少ない受講者は聞き入るという態度からも、その経験の差が反応に現れたと考える。
- 演習の模擬授業的な展開が実践的な理解を深めることになろうが、概論では体験的理解よりも概念的理解に焦点を当てたため、十分な理解が得られたか否か不明確である。
- 具体的にシラバス作成を演習の時間で実施出来なかったことが反省点である。
- 基本は理解してもらえたので、後は参考書を読んで学ぶと自信がつくと思う。
- 演習データをほしいという受講者が多かったため、その意味ではそれなりのニーズに合致するところがあったと思う。
- 後で知った目的には遠い感じがしている。
- 理解した受講生と理解できない受講生、理解しようとしなくていい受講生がいたと理解した。したがって、受講者の理解度を一概に評価することはできない。

#### ⑤講習を実施してみて、気づいた点や感想

- 社養協の講習会講師を担当した印象と本講習の印象から比較検討した点は、①研究成果の蓄積、②講習テキスト作成、③クラス毎の適正な受講者数、④経験年数の均一化、⑤講師間の研究会等である。よって、①と②は、研究費を獲得した研究成果を生かし、③と④と⑤で経験年数のクラス分けとして20名定員で経験年数を勘案し、講師間の講習内容の共有化が欠かせない。
- 講習会の実施予算の裏付け無くして成立しないため、本講習に係る研究助成を求める必要がある。特に、教材開発の研究助成を試験センターに求めたい。
- 教員用のテキストがもっと充実していくと更によい。
- 恥ずかしながら、この講習で何をやれと期待されているのか、最初から最後までよくわからなかった。
- 受講生のニーズに多様性があった。①「精神保健福祉援助演習」の担当経験年数が少なく、何らかの教授方法を知りたいというニーズをもつ受講生、②上記科目の教育経験をもたず、次年度から本科目を担当する予定があるため、教授方法を学びたいというニーズをもつ受講生、③上記科目の担当経験を数年もち、本講習への受講動機がよくわからない受講生、という3つの層が混在していた印象がある。

## ⑥今後の演習に係る講習会に盛り込むべきだと考える内容

- 講義内容にも組み入れたが、講義科目と実習・演習科目との整合性を十分に検討できるよう専任教員および非常勤講師による授業内容の調整システムづくりやFDの持ち方などの演習科目を支える授業環境を整える創意工夫の方法論の提示が欠かせない。
- 従来、全国研修会で実施してきた授業方法（独自の工夫による授業紹介）に重点を当てると同時に、演習の科目位置をカリキュラムに生かすためのモデル提示を精養協から提案したい。
- 今回は、ケースワーク、グループワーク、コミュニティワークと伝統的な三分法であったが、今後はコミュニティソーシャルワークを中心とした統合での演習がほしい。
- 講師依頼の段階で、①演習シラバスの作り方、②シラバス作成の留意点、③演習方法の概要、④演習教材の概要、⑤成績評価の方法と実際、⑥演習シラバスの作成と討議、と具体的な内容を伝えることが、今後の講習ではぜひ必要であると思う。
- ①「精神保健福祉援助演習」の担当経験年数が少なく、何らかの教授方法を知りたい、②教育経験をもたず、次年度から科目を担当する予定があるため、教授方法を学びたい、というニーズをもつ受講生は、ひっ迫度が高いと思われる。授業にすぐに活かせる方法やアイデアを得たいと望んでいる。こうした受講生に関しては、ある程度の内容を整えれば、両方の層に同時に応えることが可能であるが、③担当経験を数年もち、本講習への受講動機がよくわからない受講生のニーズに応えることが難しくなる。
- ③のニーズに内容を合わせてしまうと、①と②のニーズをもつ受講者には難易度と抽象度があがってしまう。こうした葛藤が多分に含まれる講習であった。今後、同様の講習会を開催する際には、この点をどのように整理していくのかが課題点だと思う。

## ⑦その他

- 精養協として本講習会を担える人材が絶対的に不足しているため、その対応策が急務である。
- 演習の部屋はもっと広く、可動式でプロジェクターなど機材を用意してほしい。
- 評価方法。
- エビデンスに基づいた体験学習。
- ボランティア体験、プレ実習など、様々な工夫の中で学生を精神保健福祉現場に出し、直接的な交流体験を実施しているが、単なる体験に終始してしまっている感は否めない。
- 理論に基づいた交流体験学習を構築する必要があると思う。
- 実習との結びつけ（科目単体での議論では意味がない）。

#### (4) 精神保健福祉援助実習のモデル講習に関する講師アンケート結果

##### ①講習を行うにあたって、心がけたこと、工夫された点

- 具体例を入れ、イメージしやすいようにした。
- 自分自身講習に対するイメージが明確になっていなかった。
- 教員というよりも「実習指導者の視点」を意識して programming した。
- 福祉施設における実習指導内容と方法が具体的に理解できるようにするために、シラバス、実習日誌、ワークシートなどの実物の教材を用いて講義を展開した。
- 演習では、グループディスカッションを中心に各教員が工夫をしている指導方法を提示することで、多様な指導方法があることをできるように心がけた。

##### ②講習で、最も伝えたかったこと

- 実習のマネジメントを中心に講義した。
- 事前指導の組立てを中心に演習した。
- 医療機関の特性はあるが、実習における指導のポイントや視点は地域における実習と基本的には同じである。
- 実習指導は丁寧に個別的就業にかかわる必要がある。
- 学生が福祉施設での学びを深めるために、教員が具体的な指導方法を持てるような資料や教材の提示・教材開発をできるようにすること。

##### ③受講者の反応

十分に理解してくれた	1名
まあ理解してくれた	1名
どちらともいえない	1名

##### ④③の回答についてその理由

- 共感して頂いたように思う。
- program の展開上、参加者の先生方にフィードバックしていただくことができなかったことで反応については計りかねている。
- 資料にもとづいて講義したことと、質疑応答の時間をとったことで理解が明確になったと考える。

#### ⑤講習を実施してみて、気づいた点や感想

- 指導論 I-II と実習先の違いで設定するより、事前学習、事後学習、評価、マネジメント等課題別に組み立てた方がよいと思う。
- 内容が大枠しか与えられなかったことと、前例がなかったこともあり、具体的に何を話せばよいのか迷った。
- 他の先生方との内容のすり合わせを行っていなかった為、内容がかぶってしまうところが多々あり、全体の流れとしてどうだったのかという気がする。
- 演習の方法を工夫する必要があると感じた。シラバス、事前指導、巡回指導、事後指導の教授方法、ツールの確立が望まれる。

#### ⑥今後の演習に係る講習会に盛り込むべきだと考える内容

- 演習部分は最後にまとめて時間をとった方が流れとしては良いのではないか。
- 演習の部分、参加者のニーズから考えると、ディスカッションだけではなく、具体的な work も相当量要求されるのではないか。
- あくまでも、指導担当教員の資格を得るための講習会なので、基本的な項目、内容を整理することが求められると思う。
- 養成校の種別が、通学制の大学だけではなく、専門学校、通信制などがあるので、養成種別に応じた講習カリキュラムが必要ではないかと思う。

#### ⑦その他

- 大学の先生と通信の先生がいっしょだと授業の回数、やり方が違うので、難しい部分がある。
- 全体の program について、より系統立てて、各 program の内容をしっかり整理した上で各 program のシラバスの的なものを作成する必要があるかもしれない。

## (5) 精神保健福祉援助実習のモデル講習に関する受講者の事前事後アンケート結果

### ① アンケート調査の目的と方法

2010年2月20日、21日に実施した精神保健福祉援助実習に関するモデル講習会において、それぞれの教員が実習に関して、どの程度の取り組みを実施しており、何を重要視しているか、また、何を課題だと感じているかということを探ることを目的として事前事後アンケートを実施した。

教員としての取り組みの項目として13項目に関して、また、学生への指導項目としても13項目に関して、現状として、取り組んでいるか否か、教員の認識（実習における重要度）、今後への認識に関して調査を実施した。対象は講習に参加し、事前事後アンケート双方に回答した14名である。

### ② アンケート調査の内容

取り組んでいるか否かに関しては、【4. 熱心に取り組んでいる 3. まあ取り組んでいる 2. あまり取り組んでない 1. まったく取り組んでない】の4段階での評価を行い、教員の認識（実習における重要度）に関しては、【4. 非常に重要 3. まあ重要 2. あまり重要ではない 1. まったく重要ではない】の4段階評価を講習の事前事後に実施した。

また、今後への認識に関しては、【3. 改善が必要 2. 改善したいがすぐには困難である 1. 現状で良い】の3段階評価を事前事後に実施した（表81参照）。

表81 調査項目

教員としての取り組み項目	学生への指導項目
実習施設における精神保健福祉士の実情(業務)の把握	実習生としての基本的なマナーの習得
実習指導者に対する養成校の教育システムの説明	実習施設に関する基本的事項に関する学習
実習プログラムに関する現場への提案	実習を行う地域の特性、社会資源に関する学習
実習指導者との実習プログラムに関する打ち合わせ	実習課題や目的の明確化(実習計画)
学生と実習施設・指導者とのマッチング	利用者や家族に対する基本的な理解、ニーズ把握の重要性
実習担当教員としての自己研鑽	人権やプライバシーなどに関する学習
実習担当教員として、実習の質の向上への取り組み	専門職としての役割や責任に関する認識
事前指導の充実への努力	法制度、医療や福祉サービスに関する基本的な知識の習得
実習(学生)のもたらす現場への効果に関する認識	記録の書き方や活用に関する学習
実習巡回等における実習中のスーパービジョン	相談援助、コミュニケーションの技術の習得
実習報告会など現場へのフィードバック	チームアプローチへの理解
実習記録を通じた実習指導	実習機関の経営や運営管理に関する知識
実習の事後指導及び評価	アウトリーチや社会資源活用に関する知識



### ③調査結果

#### ■現状:取り組んでいるか否か(表 82・83、図 17・18 参照)

現状に関する評価で、教員としての取り組み項目については、「実習巡回等における実習中のスーパービジョン」、「実習の事後指導及び評価」、「事前指導の充実への努力」の項目が、4 点満点中、平均点で各 3.4、3.3、3.2 と比較的高い数値をしめしていた。「実習プログラムに関する現場への提案」、「実習指導者との実習プログラムに関する打ち合わせ」、「実習（学生）のもたらず現場への効果に関する認識」に関しては、平均得点で 2.5、2.5、2.6 と他に比較して低い傾向が見られた。また、学生への指導項目では、「人権やプライバシーなどに関する学習」が平均点 3.4、以下、「実習施設に関する基本的事項に関する学習」、「実習課題や目的の明確化（実習計画）」、「利用者や家族に対する基本的な理解、ニーズ把握の重要性」、「相談援助、コミュニケーションの技術の習得」が、各平均点 3.3 となっていた。「実習機関の経営や運営管理に関する知識」だけが 2.3 と極端に低く、あとの項目は平均点 3.4 から 2.9 の間であった。

#### ■教員の認識(重要度)(表 82・83、図 17・18 参照)

教員としての取り組み項目における事前評価では、「実習担当教員としての自己研鑽」、「実習の事後指導及び評価」が平均点 3.9 と最も高く、「実習（学生）のもたらず現場への効果に関する認識」、「実習プログラムに関する現場への提案」が、3.2、3.3 と最も低い得点であった。また、事後評価の平均点で見ると、「学生と実習施設・指導者とのマッチング」が最も高く全員が 4.0 をつけていた。その他のいずれの項目も 3.9 から 3.8 の高得点となっている。また、講習の事前・事後で最も得点が伸びたのは、「実習（学生）のもたらず現場への効果に関する認識」であり、次いで「実習施設における精神保健福祉士の実情（業務）の把握」、「実習指導者に対する養成校の教育システムの説明」、「実習プログラムに関する現場への提案」、「学生と実習施設・指導者とのマッチング」が伸びを見せた。学生への指導項目に関しては、事前・事後で大きな変化はなかった。

#### ■今後への認識(表 82・83、図 19・20 参照)

教員としての取り組み項目における事前評価では、「実習担当教員として、実習の質の向上への取り組み」、「実習担当教員としての自己研鑽」が平均点で各 2.8、2.7 と高い数値を示し、改善の必要性が高いと評価できる。逆に、「実習報告会など現場へのフィードバック」、「実習施設における精神保健福祉士の実情（業務）の把握」、「学生と実習施設・指導者とのマッチング」、「実習（学生）のもたらず現場への効果に関する認識」に関しては、平均点が各 2.0、2.1、2.1、2.1 となっており、改善の必要性はそう高く認識されていない結果となっていた。しかし、事後評価では、上記のうちの「実習施設における精神保健福祉士の実情（業務）の把握」、「実習（学生）のもたらず現場への効果に関する認識」に関して得点が各 0.5 から 0.6 上昇し、改善への認識に変化が見られた。その他「実習巡回等における実習中のスーパービジョン」に関しても得点平均が 0.5 上昇した。

学生への指導項目に関しては、「専門職としての役割や責任に関する認識」、「法制度、医療や福祉サービスに関する基本的な知識の習得」、「記録の書き方や活用に関する学習」が事前調査で各 2.9 と高い得点を示した。一方、「実習生としての基本的なマナーの習得」、「実習施設に関する基本的事項に関する学習」、「実習を行う地域の特性、社会資源に関する学習」、「実習課題や目的の明確化（実習計画）」は各 2.3 であり、改善の必要性がそう高く認識されているわけではなかった。しかし、事後アンケートにおいては、このうち「実習課題や目的の明確化（実習計画）」に関して

0.6 上昇し、改善への認識に変化が見られた。その他「実習生としての基本的なマナーの習得」、「実習施設に関する基本的事項に関する学習」、「実習を行う地域の特性、社会資源に関する学習」に関しても、事前評価よりも改善に対する認識が向上していた。

他方、当初改善の必要性が高いと評価されていた「専門職としての役割や責任に関する認識」、「法制度、医療や福祉サービスに関する基本的な知識の習得」に関して、各 0.4 得点が下がり、改善に関する認識に変化が見られた。

#### ④考察

本アンケートに関しては、講習に参加した 14 名のデータであり、参加者が教員集団を代表しているという言い切れない。よって、今回のアンケートも参考資料ということになるが、結果から読み取れる傾向として、実習担当教員としての研鑽、実習の質の向上、また、巡回指導や事前事後学習など大学教員としての個人の努力や学内での調整等で実現できる部分についての認識は事前アンケートでも高い傾向が見られた。しかし、事後アンケートでは、「実習施設における精神保健福祉士の実情（業務）の把握」、「実習指導者に対する養成校の教育システムの説明」、「学生と実習施設・指導者とのマッチング」、「実習（学生）のもたらす現場への効果に関する認識」などの得点に伸びが見られた。つまり、自己完結ではなく、実際に学生を送り出す施設との相互理解やマッチング、実習施設に何をもって貢献できるかといった視点が強化された結果が見られた。

学生への指導に関する教員の認識にはあまり変化がなく、ほとんどの項目に関して事前・事後ともに高い認識をもっていることがわかる。今後への認識としては、「実習課題や目的の明確化（実習計画）」に最も大きな変化が見られ、改善していく意識が高まった結果となった。また、実習生としての基本的なマナーや実習施設や地域に関する基本的知識に関しても改善への認識が高まった結果となり、専門知識や技術の習得が逆にポイントを下げていた。今後への認識に関しては、もともときちんと実施出来ているという視点からの得点の低さという評価もできるが、事前・事後で変化があったことから、明確な対象を意識し、実習に直結する項目が改善項目として挙げられたとも受け取れる。

事前・事後アンケートを通して、講習の成果を評価すると、ひとつは大学だけで、あるいは、教員だけの努力で実習が成り立っているわけではなく、相互の理解を深め、お互いがお互いの活動に貢献できるような連携が必要であること、また、実際に実習に送り出す際に、一般的な知識や技術の習得が前提となるが、実習先の個別性を十分に理解した上での実習であることへの認識が高まったと評価できる。

表82 精神保健福祉援助実習のモデル講習における評価の平均点(教員としての取り組み項目)

教員としての取り組みの項目	取り組んでいるか否か	教員の認識(重要度)		今後への認識	
	現状	事前	事後	事前	事後
実習施設における精神保健福祉士の実情(業務)の把握	2.9	3.4	3.9	2.1	2.6
実習指導者に対する養成校の教育システムの説明	2.7	3.4	3.9	2.4	2.6
実習プログラムに関する現場への提案	2.5	3.3	3.8	2.4	2.6
実習指導者との実習プログラムに関する打ち合わせ	2.5	3.5	3.9	2.3	2.6
学生と実習施設・指導者とのマッチング	3.1	3.5	4	2.1	2.1
実習担当教員としての自己研鑽	3.1	3.9	3.9	2.7	2.5
実習担当教員として、実習の質の向上への取り組み	3	3.8	3.8	2.8	2.8
事前指導の充実への努力	3.2	3.8	3.9	2.6	2.8
実習(学生)のもたらす現場への効果に関する認識	2.6	3.2	3.8	2.1	2.7
実習巡回等における実習中のスーパービジョン	3.4	3.8	3.9	2.3	2.8
実習報告会など現場へのフィードバック	2.8	3.8	3.8	2	2.2
実習記録を通じた実習指導	3.1	3.8	3.9	2.3	2.4
実習の事後指導及び評価	3.3	3.9	3.9	2.4	2.6

表83 精神保健福祉援助実習のモデル講習における評価の平均点(学生への指導項目)

学生への指導項目	取り組んでいるか否か	教員の認識(重要度)		今後への認識	
	現状	事前	事後	事前	事後
実習生としての基本的なマナーの習得	3.2	3.9	3.6	2.3	2.6
実習施設に関する基本的事項に関する学習	3.3	3.9	3.6	2.3	2.6
実習を行う地域の特性、社会資源に関する学習	2.9	3.6	3.5	2.3	2.6
実習課題や目的の明確化(実習計画)	3.3	4	4	2.3	2.9
利用者や家族に対する基本的な理解、ニーズ把握の重要性	3.3	3.8	3.9	2.4	2.6
人権やプライバシーなどに関する学習	3.4	4	4	2.4	2.6
専門職としての役割や責任に関する認識	3.1	3.9	3.9	2.9	2.5
法制度、医療や福祉サービスに関する基本的な知識の習得	3.1	3.8	3.9	2.9	2.5
記録の書き方や活用に関する学習	3.1	3.8	3.9	2.9	2.6
相談援助、コミュニケーションの技術の習得	3.3	3.8	3.8	2.7	2.6
チームアプローチへの理解	3	3.8	3.9	2.8	2.7
実習機関の経営や運営管理に関する知識	2.3	3.3	3.4	2.6	2.4
アウトリーチや社会資源活用に関する知識	3.1	3.7	3.8	2.8	2.8

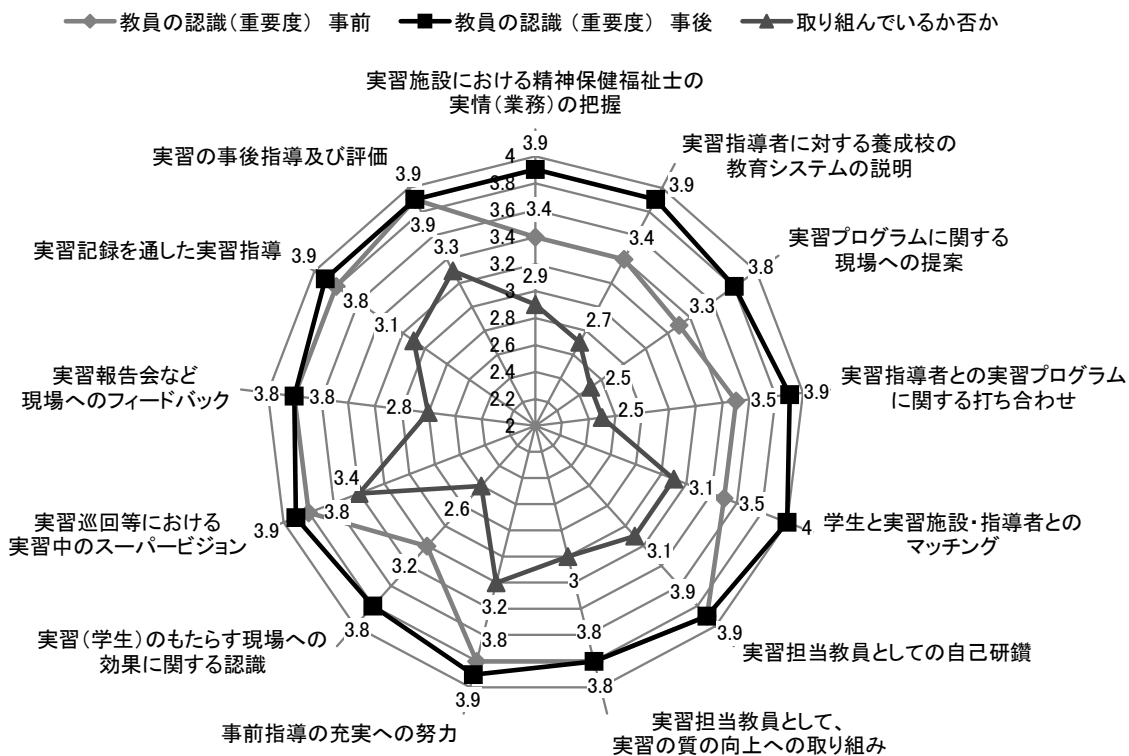


図17 教員としての取り組み項目に関する現状及び、重要度への認識(事前・事後)

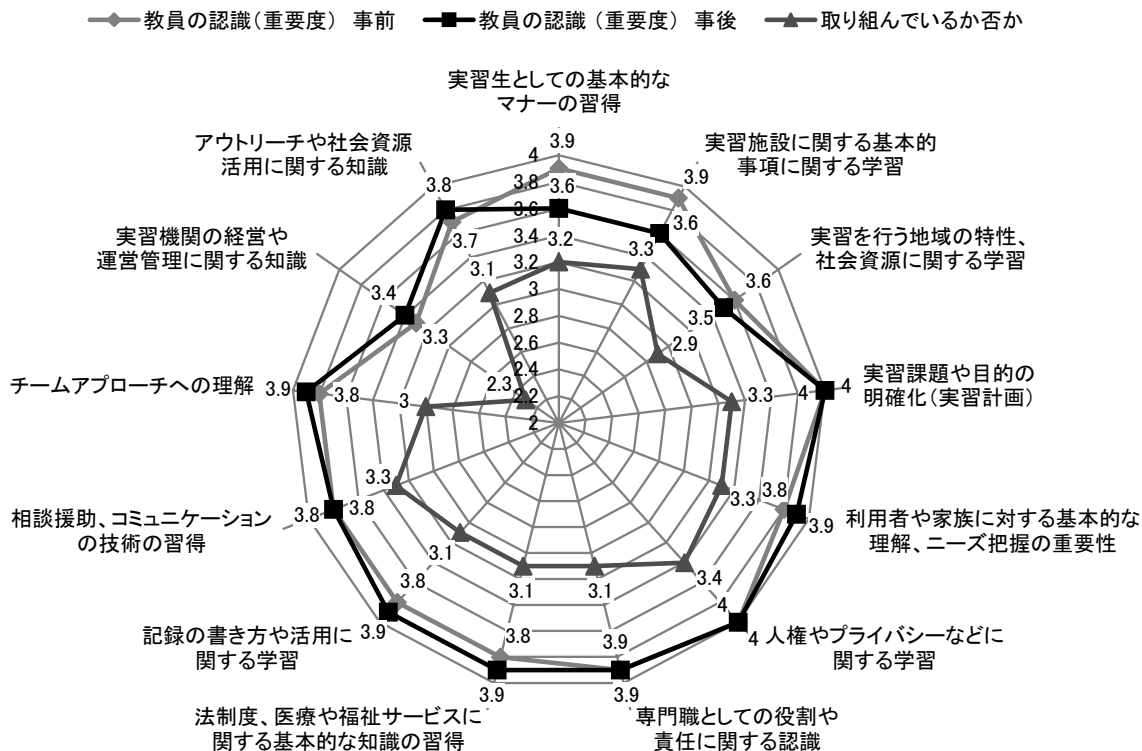


図18 学生への指導項目に関する現状及び、教員の認識(事前・事後)

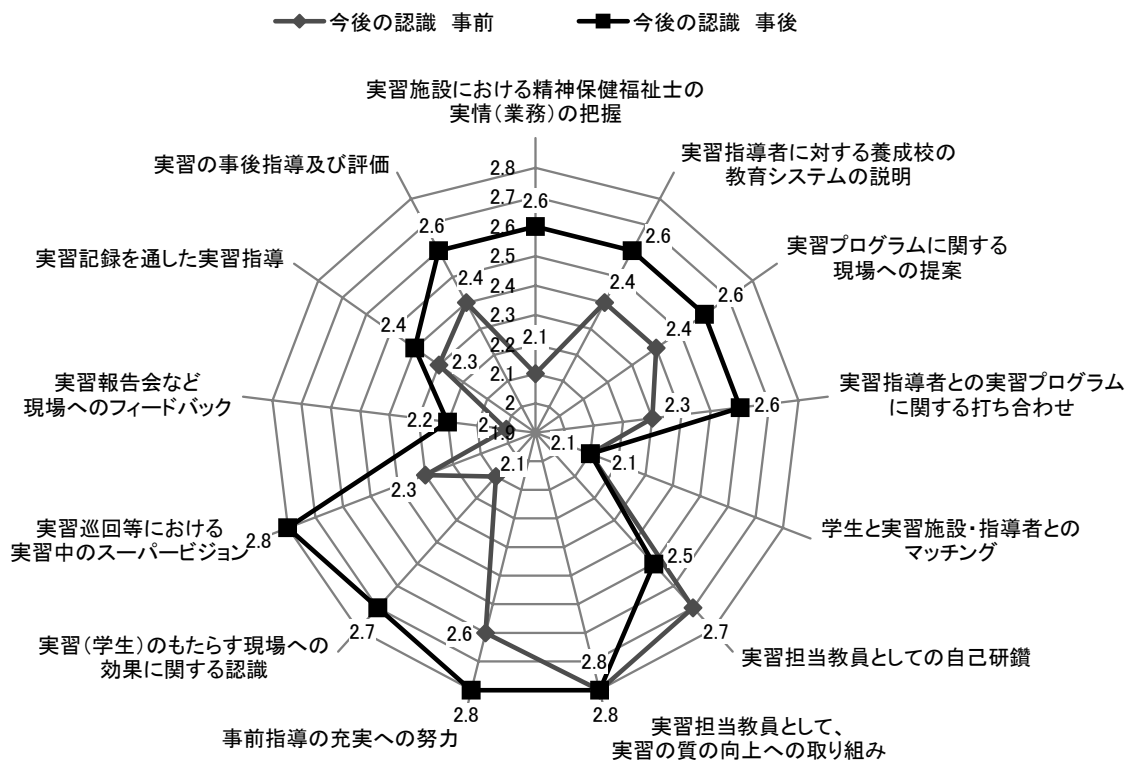


図19 教員としての取り組み項目に関する今後への認識の変化(事前・事後)

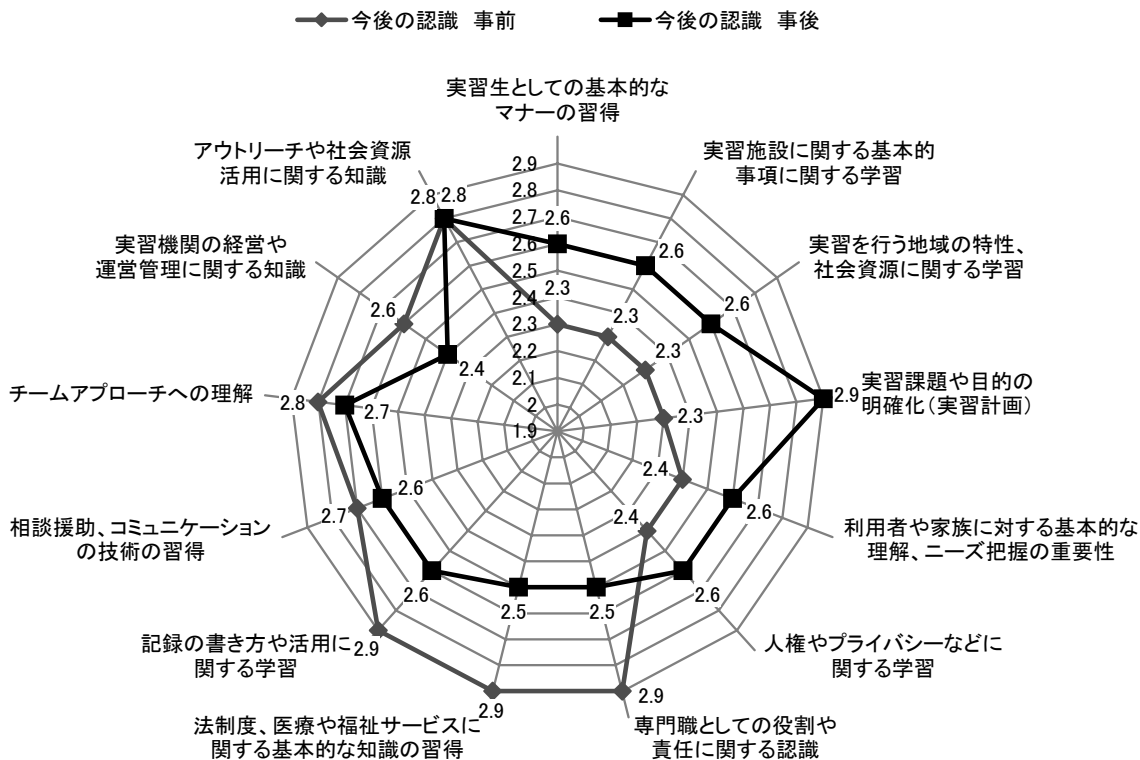


図20 学生への指導項目に関する今後への認識の変化(事前・事後)

## (6) 精神保健福祉援助実習のモデル講習に関する受講者へのグループインタビュー結果

### ①調査の対象・時期

2010年20日、21日に実施した実習のモデル講習を受講した5名を対象とし、講習最終日(17:30~18:30)に講習会場にて、グループインタビューを実施した。対象者の属性であるが、男女比は男性2名、女性3名、年代は30歳代1名、40歳代1名、50歳代3名であった。勤務先は、大学4名(うち通信制1名)、養成施設1名、PSW国家資格は、有が4名、無が1名、現場経験に関しても同様であった(現場経験 平均253.5か月)。全員が現在実習の授業を担当しており、専任教員になってからの期間は、平均100.0か月であった。実習を担当してからの月数平均は、84.8か月である。

### ②調査の目的・内容

本調査は今回精養協が実施した精神保健福祉援助実習に関するモデル講習会の内容について評価し、今後、大学及び養成施設等の実習担当教員に必要とされる研修内容等を明確にすることを目的として実施した。

グループインタビューにおけるインタビュー項目は以下のとおりである。

- ①勤務先における実習教育への自分のかかわり
- ②今回のモデル講習を受講しての感想・意見(講師の資格要件への意見を含む)
- ③実習担当教員に求められるものは何か(受講者の資格要件への意見を含む)
- ④実習担当教員養成で採り上げてほしい内容
- ⑤今後の実習担当者養成に対する期待・意見

### ③倫理的配慮

調査協力者には事前にインタビューの概要に関して説明し、個人が特定されるような形での公表はしないことを前提に、承諾書を交わしている。当日は、参加者の了解を得て、記録のために逐語記録担当者が録音を行い、ビデオカメラを設置し、観察記録者を別においた。ビデオテープなどの資料は研究が終了した後は、責任を持って破棄することを伝え、了承を得た上でインタビューを行った。

### ④結果(表84参照)

#### ■機関における教員の立ち位置

勤務先における精神保健福祉士の実習教育にどうかかわっているのかということであるが、5名中4名が実習の統括的な立場であり、中には、精神保健福祉士のみならず、社会福祉の現場実習を含めて中心的に担っているという人も2名いた。精神保健福祉士国家試験受験資格に関する直接の実習担当は各機関1~2名という中で、対外的な事務手続きを含めすべての中心であることも多い中で、そうした煩雑な手続きや実習の事前事後指導、巡回など、かなりのエネルギーを割いていることに関して、あまり機関内での共有がなされていないこと、人的・物的余裕がないことなどが語られた。また、大学の大きな方針の中で動いており、人的・物的資源にも限界やジレンマを抱えていることがわかる。

また、大学と専門学校、通学と通信でも実習への取り組みが異なっており、養成校といっても

共通する部分と種別によって異なる部分があり、講習会の中でも専門学校の教員や通信課程の教員がそうした違いを意識する場面があり、種別ごとの特性に応じた学習の場がほしいという意見も出た。

### ■講習・講師への期待

今回の講習を振り返っての感想・意見として、講師と参加者の関係としては、講師も確信をもって講習講師をしているわけではなく、「一緒に悩んでいる」と受講者は感じていて、悩んでいること自体に受講者も共感しており、試行錯誤しているという講義から「ヒントをもらい、自分なりのやり方を創り上げる」「自分にない視点を学んで活かす」といった姿勢で臨んでいたことがわかった。本インタビューへの参加者がイメージする講習講師としては、「工夫している人」「悩み、悪戦苦闘している人」「目指している人」と、現在進行形で実習に取り組んでいる同じ教育機関の教員というイメージがひとつ明らかとなった。さらに、現場の精神保健福祉士で、実習に関して、「意識して語れる人」を招いてほしいというニーズや「思いをメッセージとして伝えてほしい」という内容が語られた。

上記の結果から、今回の参加者が望んでいるのは、講師も参加者も実習指導者もお互いが学び、育ちあうといった講習なのではないかと推測できる。

### ■講習における共通理解の重要性

前述したような講習・講師への期待と関連するが、講習に参加する教員間で共通していたのは、1~2名配置の中で日常業務に追われ、なかなか実習に関する本質的な内容に関するディスカッションがないことであった。本来の講習の具体的中身とはずれてしまう部分もあるが、いかにこれまで実習等に関して、本音で語り合い、共有するという場面が日常的になかったかという気づきが複数の教員から語られた。また、職場ではできないが、他大学の状況を知ることによって、自分の取り組みを検証したいという意見もあった。

今回がはじめての講習ではあったが、初任者だけでなく、経験のある人もない人にもまず、お互いを知り、共有していくプロセスへのニーズが高いことが明らかとなった。

### ■学生の現状と教員に求められる効果的な働きかけ

複雑で多様な社会状況の中で、教員として求められるものは何かという話の中で、まず、昨今の学生の状況についての話が出、資格を目的として大学に入ってくる人たちの意識をどう耕していくのか、そこに教員としてどのような能力が求められるのかという内容が語られた。「動機、モチベーションが大事」だが、「学生のモチベーションをいかにあげるか」、教員には「実習の本当の意味を伝える義務」があり、そこにこそ「コーディネーター力を発揮する」べきであるといった意見が出た。また、マニュアルを元にしたような内容ではなく、「ツールを活用する柔軟性」、「学生の持ち味を生かして、授業を創造する」、「伸び代を残した教育」、「幅をもたせていく教育」など、柔軟に対応できる能力をいかに育むのかといったことへの関心が高かった。

### ■拠り所としての価値と具体的な講習へのニーズ

講習で取りあげてもらいたい内容として、一番に挙げたのは、ソーシャルワークの価値の重要性を伝えることであった。また、具体的な講習へのニーズとしては、実習の授業で使用できる

「具体的なワーク」、「事前事後指導」の内容などを含め、「実習担当教員のモデル」となるような具体的な教授法を提示してもらいたいといった事柄があがってきた。「職場では誰も教えてくれない」現状にあり、「教員の実習教育の必要性」は切実なものだと感じられた。

あわせて、「実習担当教員講習の対象と評価」についても質問してみたが、講習の対象者に関しては、年限で限定すべき内容ではないが、その質をはかることが難しく、結局年数で切らざるを得ないという意見もあった。また、講習の評価に関しては、レポート課題を課してはどうかといった意見が出たに留まった。

## ■現場との連携及び実習教育の仕組みづくりへの課題

「機関における教員の立ち位置」のところでも出ていたが、機関によって条件が異なる現状の中で、どうやって共通性（共通理解の確保）を確保するかということは、実習教育を考えていく上で重要な要素である。そこで、「実習に関するガイドラインの必要性」が語られた。また、所属する養成機関や学生のことに教員の焦点が当たりがちであるが、昨今の厳しい医療・福祉の現状の中で、実習指導者自身がエンパワーされない状況下におかれていることがあることへの指摘もあった。連携はもちろんであるが、その具体的中身として、現場の精神保健福祉士を支援するシステム構築などに教員がもっと機能すること、実習においても一緒に創り上げるといった姿勢が必要だということには参加者の共感があった。お願いするという立場で傍観するのではなく、もっと教員が主体的にかかわり、「現場と教員の建設的なバトル」があっても良いのではないかという発言も聞かれた。

また、カリキュラム改正における実習担当教員の資格にかかわる講習だけでなく、「検証の場としての教員研修の必要性」が語られ、「教員の質を高める更新研修」、「初任者研修、中堅研修という積み上げ研修」などへのニーズも高く、本協会としての今後の研修体制をどう考えていくかということに繋がっていく議論があった。

## ⑤考察とまとめ

モデル講習会終了直後に参加した5名の方にインタビューを行ったわけであるが、今回の講習に関しては、概ね高く評価していた。特に実習に関してこんなに長時間の研修はこれまでなく、教員同士がお互いの実践に関して共感をもって語り合えたこと自体の意味を評価する声が多かった。ただし、講習本来の趣旨からすると、今後、経験の共有だけでは意味をなさないことも指摘があった。

講習の講師の条件としては、実習指導が完全にマニュアル化できるものではないため、自分自身も悩みながら試行錯誤を繰り返しているような人で、それを開示し、一緒に成長しようとする人や、現場のことを意識化して語れる精神保健福祉士などへのニーズが高かった。最近では資格を目的として入学してくる学生が多く、資格取得のモチベーションはあっても、ソーシャルワークへの志向があるわけではない人も多い。そこに実習に向き合う動機づけの難しさがある。学生への動機づけ、実習がどういう意味を持つのかという根本的な理解などがどうすれば促進されるのか、どう教授すればいいのかということへの関心が高かった。その他の具体的な教育内容としては、ソーシャルワークにおける「価値」の重要性を伝えること、わかりやすい教材を使用した参加型の研修を望む声が多かった。そこで、強調されたのは柔軟性で、毎年学生のカラーが異なるので、学生の柔軟性を育むこと、幅を持たせること、伸び代を残すことなどが語られたが、それ



を授業として展開することは実は非常に難しく、単にツールの使い方を学ぶだけでなく、それを使いこなせる教員の柔軟性を鍛えることも講習の内容として重要だと考えられる。

前述したことと関連するが、実習の授業はマニュアル化が難しいことについて、参加した教員間でコンセンサスを得た。だからこそ、教員も柔軟であることが求められる点でも一致を見たが、反面、モデルやガイドラインの提示についてはニーズがあり、細かいところでは各教員の裁量に任される部分が多いが、実習という特殊な授業に関して何らかの指標を示してほしいというのも現場の教員の偽りない気持ちなのであろう。また、所属する教育機関で忙殺される中、目の前の学務や学生だけに目が行きがちであるが、実習は現場との接点なしには成立しない。現場実習において学生により良い学びを提供するためには現場の精神保健福祉士との連携、協働が前提となるため、それぞれの立場性を理解するために、教員がもっと主体的にかかわることの必要性も指摘された。

今回の講習においては、精神保健福祉士としての現場経験が長く、教員としても5年以上経過している人が多かった。そこで出た意見としては、教員の質の向上、検証の場としての講習を考えた場合に、初任者だけでなく中堅研修や更新研修という形で、積み上げていくことの重要性を指摘するものであった。それは、今回のカリキュラム改正に伴う教員の講習という範囲を超えたものなのかもしれないが、学生の意識を耕し、実習の意味を問い直すことや、現場の精神保健福祉士との連携を深め、実習にとどまらない社会的貢献を視野に入れることなど、教員としての在り方を教員自身が問い直すという意味で重要な提案が含まれていると考えられるのである。

表84 精神保健福祉援助演習のモデル講習に関する受講者へのグループインタビュー

機関における教員の立ち位置	教育機関での実習教育システムの担い手	精神保健福祉士コースの主任	社会福祉士が全員が取れるというカリキュラムの中の2階建て方式の精神保健福祉士コースの主任。
		ソーシャルワークの実習の一番土台のところを担当	2年目から実習、精神の主任という形に入っていますので、精神の実習の全般的なところをさせてもらっています。それで、前任校で私が大学に勤めた年に精神ができるということがわかって、私が全部前任校で立ち上げてやっていた。ソーシャルワークの実習の一番土台のところを今、担当。
		実務的なまとめ役	実質的なところでの教員一貫体制というか、全員で総取っかかりでやっているというところがあって、その位置づけでは、一応、学科長、実務的なまとめ役なんていうふうな部分の仕事が課せられています。
		全学的な実習指導委員会の委員長	全学的な実習指導委員会の委員長、学科長です。そういう学則の改正ですとか、教育課程改正時の学内手続ですとか、あと東北厚生局への申請等々などに実習も絡めて。
	所属する教育機関の環境整備	機関の方針によって動きがちな教員	視野が狭くなって、そのいる大学の方針とか、そういうところで動きがちになっているなというのもやっぱりある。
		機関による教育内容の限界	いい実習をしようと思えば、やはり物理的にそういう環境が整っていないと、いくらその教員が研修を受けていい実習をしようと思っても、物理的な限界はあると思います。
	大学と養成施設・通信との違い	大学の通信教育科ゆえの学生数の多さ	私のところは通信教育科ですので、ほんとうにまず学生数が多い。
		大学の通信教育科ゆえの学生数の多さ	大学の先生方に比べれば、変な話、量的というんでしょうか、1年間に実習という部分でかかわる学生さんの数はかなりの数字。
		養成機関の種別ごとの学習の場の必要性	ちょっと違う部分もあるので、そこはそれだけ取り上げるのは難しいかと思いますが、通信もやっている大学の先生というか、専門学校でもですけども、そういう方と一緒に勉強できる場みたいな、何かそういうコーナーでも、企画とか。

講習・講師への期待	一緒に成長する講習	一緒に悩んでいる、悩んでいてええんや	自分が実習に対して、向き合っていたのかなというふうなところがあって、もう一度向き合ってみようかなという気持ちになれたりとか、また、先生方からのいろいろなお話を聞く中で、一緒に悩んでいる、悩んでいてええんやというふうなところも思った。
		講習からヒントをもらい、自分なりのやり方を創り上げる	実習生と同じように、教員も自分自身の体験と照らし合わせて、自分のできる力量で自分のやり方をつくり上げていくしかない。
		お互い悩んでいるから、自分にはない視点を学んで活かす	やっぱり悩んでいるんですね。悩んでいるからこそ、そういうことも言うんですけれども。研修でも、いろいろな自分にはない視点をいっぱい見せていただいたので、そんなのもあるかという、そこはすごくためになったし、どう活かそうかと。
	成長を目指す講師像	工夫している人	実際にやって、工夫してやってみて。
		悩み、悪戦苦闘している人	うまくできているかどうかよりも、悪戦苦闘して工夫して、私、こんなことで悩んでいますねんということ言ってくれる人だったらいい。
		目指している人	目指している人だったらいいんじゃないかなと思います。
	現場の PSW からのメッセージ	意識して語れる人	実践を意識化して語れるという人。
現場の思いをメッセージとして伝えてほしい		学生ばかり向いちゃっているので、現場で指導してくれる人というところが抜け落ちていた時期があったんですね。こういう場所にそういう先生に、PSWに来ていただいて、現場の思いみたいなものも、もししたら私たちにメッセージを発していただく。	
講習における共通理解の重要性	教員同士の共通理解の確保	学内で実習に関する意見交換の場がない	1人ないしは非常に少人数でやっているんだな、そのことに関連した意見交換をする場というのはほんとうになかった。
		共有したりとか、みんなで話し合うことの重要性	共有したりとか、みんなで話し合う、そういった意味での、講義とは銘打っていましたが、話題提供みたいな、そういう中でいろいろな話も聞けたというのは、昨日も含めてあった。
		自分の体験や感情を使いながら、学び、共有していく	自分の体験を使いながら、感情を使いながら、体験型の学習というふうな形で教授の仕方を学んでいく、それから評価の仕方を共有のものにしていくとか、そういった作業がこの講習の中で行われるといいな。
		多様な視点からのアプローチへの気づき	いろいろな視点を聞けたので、自分では気づけなかった、でも、これって学生にまた伝えられるよねという意味では、やれてよかった。
		悩んでいることにおいては、みんな一緒	特に初めてだから、私もかつてはそうでしたけれども、初めてだから悩んでいる、初めてだからわからない、逆にそういった同士が一緒になって、変な話、一緒なんだなというふうに。
		他の大学での教育内容を知ること、自分のやり方の点検の場	ほかの大学や養成校さんでされているような内容、どういう教育をされているのかとか、自分の今やっているやり方というのが正しいのかとか、もっと改善が必要なのかといったようなことも含めて、非常に考える機会になったので大変よかった。
学生の現状と教員に求められる効果的な働きかけ	資格ありきの学生	親に言われ、資格を取りに来る学生	大学もそうですよ。親に言われたから、資格が取れるから。
		カリキュラムで指定されているから行う実習	単にカリキュラムで指定されているから行くんだというだけしか考えられない人というのが多い。
		資格目当ての学生	ほんとうに資格目当ての方が多くて。
	学生の意識を耕す	学生のモチベーションをいかにあげるか	どうしたら学生のモチベーションをちゃんと上げられるとか、通信なので会う機会はスクーリングのとき、基本、それぐらいしかないので大変難しいんですけども、そういう投げかけとか。
		実習の本当の意味を伝える義務	ほんとうの意味で実習の意味というものを、私は半分の願いを込めてなんですけれども、学生さんに伝え、感じてほしいし、それはある意味、伝えるのは、私自身も今でもやっている現場上がり教員としては、ある意味、義務なのではないかなと。
		コーディネーター力を発揮する	学校の中だけ、大学の中、授業の中だけで完結するのではなくて、もっと地域とか、いろいろな人の力をかりながら、だからゲストスピーカーをたくさん呼んでくるとか、卒業生の力をかりるとか、そういう、だからワーカーに求められているコーディネーター力みたいなものを教員も発揮しましょうよみたいな。

学生の現状と教員に求められる効果的な働きかけ	学生の意識を耕す	資格が出発点であるが学生の意識を耕す	資格を取りたいからですでも、それをさらにもっと深められる、志望動機、職業意識というのうまく、どうやったらそこを耕せるのかというところを、学生のそれぞれの持ち味を生かしてというかわり方、それを悩んでいるところ。
		動機、モチベーションが大事	動機とかモチベーションのところがすごく重要。
	学生の伸び代を残す教員の柔軟性	ツールを活用する柔軟性	ツールがあったら、これを使えばもういいんだみたいになると、全然教育としては逆効果になるかもしれないじゃないですか。だからアセスメントするときに、要するに埋めればいいという話じゃないよというふうなところを考えると、どうそれをうまく活用するかみたいなのところ、まさにその教授法のようなところが、どういったらいいんでしょう。
		学生の持ち味を生かして、授業を創造する	どう同じ教材を使っても相手とのコミュニケーションというのを進めていくかというのは毎年違う。ゆとりを持たせて、あんまりがちりと決めないようにつくってくださっていたのが、かえって、演習する側からすれば、それぞれの持ち味を生かして、創造して出してくることができた。
		伸び代を残した教育	教員も何かちつとした知識が教授されて、そしてそれを何も現場でやっているわけではなくて、悩みながら、学びながら、工夫しながら、成長していきながら学生を養成していつているんだというふうな、そういうやり方というのは、何かこういう講習の内容に取り込まれることでオーソライズされる。伸び代を残した形で卒業させたいと思っています。そういう意味で、肯定的な自尊感情を持って事後指導をやる。
幅をもたせていく教育	これができたらいいという話だけで終わっちゃうと、薄っぺらいことになってしまう。だから、これができたらいいというのは決めつつも、いかにその幅を持たせていくかというところをこういうところできちんとできれば。		
拠り所としての価値と具体的な講習へのニーズ	拠り所としての価値	ソーシャルワークの価値は外せない	これだけは外せないということというところ、価値以外にはちょっと思いつかないんです。そうですね、質問は全部に共通した内容ということですね。
		価値がない技術と知識は意味がない	価値がない技術と知識は意味がないと思うんです。そうすると、ワーカーとして何を一番大事に、これは外せないよという、今日も出ていましたね。ストレングスだとか、エンパワメントだとか、ああいうふうな一人一人弱い立場であっても大事にするんよとかというふうなところは、それは絶対外せない。
	実習に関する具体的な教授法へのニーズ	具体的なワークの必要性	ワークみたいなのも必要になっていく、今後の研修の方向性を考えると、そこら辺は必要になってくる部分。
	実習に関する具体的な教授法へのニーズ	具体的な演習、事前事後指導	具体的な実習、事前事後指導に特化して、グループに分かれてどう実習生や実習指導先に提案していくのかとか、声をかけていくのかとか、ストレングスの視点ですとか、いわゆる教授法にかかわる部分についての演習ができた。
		実習担当教員へのモデル提示の必要性	実践という形でやっていく中で積み上げていって技術になる部分だと思うので、やっぱり1つの、もしかしたらある先生のモデルかもしれないけれども、そういった教授法的なものというのは多分、必要なのかな。
		職場では誰も教えてくれない	何か場があれば、なかなか自分の所属しているところでそういうのを手とり足とり教えてくれるわけじゃないので。
		教員の実習教育の必要性	教育機関で実習教育というのはやったことがないんだから、そういった勉強をしてから始めてくださいねというふうな形になるような。
教員の実習教育の必要性	前の大学で言われたのは、新人の先生がいて、何でちゃんと教えてあげないのというふうに言われたんです。そう考えると、例えば講習を受けたら、1年間はサブでつきなさいと、2年目から初めて担当できるよとか、何かそういうふうにするとか、何か工夫がね。		

拠り所としての価値と具体的な講習へのニーズ	実習担当教員講習の対象と評価	教員にどこの時点で何を求めるのが難しい	だからどこの時点で何を求めるのかというところがすごい難しいと。そこは思いますね。
		年数だけでははかりきれない	年数じゃないような気もするんですけども、じゃあ、それをどうやって確かめんねんという、難しい。
		終了1年後にレポート課題を課す	1年後にはレポート課題を出しなさいとか。
		結局は年数	結局は年数でいくしか多分ないのかなとは思んですけども。
		新任教員全員を対象とする	新しく教員になる人は全員受けるとかという、そこですべてが網羅されるわけではないですけども、そういった行き方、いいかどうかは別で、そういう行き方、方法としてはありますよね。
現場との連携及び実習教育の仕組みづくりへの課題	指標を示す必要性	機関によって異なる現状の中で、どうやって共通性(共通理解)を確保するか	今回の研修で、皆さん、先生方がかなり手探りでされているんだなというところをすごく感じた。違う施設に行くと、違うところから来て、違う教育を受けた、ばらばらなだけけれども、どうやって共通性(共通理解)を確保できるだろう。
		実習に関するガイドラインの必要性	中断するかどうか迷ったときの1つのガイドラインということで、今までも統合失調症とか、うつとか、そういう、不登校経験とか、今回も出ていましたけれども、そういうものもあるんですが、発達障害の学生なんかも、ちょっとぎりぎりで見落としていて、実習に行かせる段になって実習指導者に発見されたという場合も今回あった。
		実習に関するガイドラインの必要性	実習評価のこと、ガイドラインというんですか、その辺を、それは研修でどうするというのではなく、しかるべきところで決めていかないといけないんでしょうけれども、その辺で皆さん悩んでいるということが今回わかったので、こういうことなんだということのある程度のガイドラインが研修の中で示せると、質の均一化ということにもなるのかなと思った。
	養成校と実習指導者との連携	エンパワーされない現場への支援	職場でエンパワーされない職場がいっぱいあって、ワーカーはアクションを起こして、ソーシャルアクションを起こして、環境を変え得るんだと授業では言っているんだけど、できていない現場があって、できていない私たちがいてというところで、でも、そこをちゃんと何か視点を当てて教えるような、何か欲しいなと、だれか教えてくださいというふうな感じ。
		実習指導者への支援システムの必要性	やっぱり1人職場で実習指導はこれでいいのか悩むというときに、じゃあ、県の単位でどういう支援ができるんだろう、それを研修でやるということもありますけれども、そういう支援システムみたいなものをどうつくっていったらいいんだろう。
		実習指導者との連携にどう機能するか	PSWの実習指導者との連携というところで、私たちが何か機能しなきゃいけない。
		お願いする立場から実習を一緒に創り上げる立場へ	養成校と実習指導者との連携というところでは、実習指導者に今まではお願いするばかりで遠慮がちだったんですけども、そこをお互いに一歩乗り越えて、どういう実習を一緒に、共同作業とおっしゃっていましたが、つくり上げていきたいのかというところを、個別でも、あと県単位でも、これから創り上げていけるといいなという思いにさせられた。
		現場と教員の建設的なバトルの必要性	ある意味、現場と教員の世界って、いい意味での建設的なのということの相互批判という部分でのバトルはやれていいし、逆にやれないといけない。
		研修を積み重ねていく必要性	検証の場としての教員研修の必要性
	教員の質を高める更新研修		必ずしも社福に当てはめる必要はないのかなと、むしろそういった質的な部分も考えた中で、更新じゃないですけども、定期的にこういったところで確認する場所、それが先ほど〇〇先生がおっしゃった中堅者研修みたいな。
	協会独自の研修システムの必要性		精養協独自の何か研修システムとかもまた考えていく必要。
	初任者研修、中堅研修という積み上げ研修		初任者研修、中堅研修という積み上げ。

## 4. 結論

調査1の実態を踏まえ、「実習担当教員養成に係るモデル講習会」を実施した。講習会における参加者及び講師へのアンケート結果から、受講要件、科目、シラバス、講師要件等、本格実施される際の講習会プログラムに関して検討を加え、以下のようにまとめることができた。

(1) 受講要件に関する具体的な意見はなかったが、実習の授業を担当した年限やP S Wとしての現場経験ということとはあまり関連しない実態となった。参加した教員の約4割が50歳代で、国家資格、現場経験ともに8割以上があると回答していた。P S Wとしての経験の平均は190か月、実習の授業を担当してからの年限は平均68か月であった。経験豊富な受講生が多かった背景には、P S Wの養成に関しては各校1~2名の教員配置になるため、教育機関内での共有が難しい部分があり、他大学での情報を得る貴重な機会として研修の場を捉えていることが挙げられる。また、国家資格ができてからの年限が短いことから、現場での経験はあっても、実際に学生に教えるとなった時にノウハウやスキル獲得へのニーズが高まる傾向があると考えられる。

講習実施後のアンケート及びインタビューでは、初任者の研修だけでなく、自らを振り返るためにも、ある程度キャリアのある人たちを対象とした研修や継続研修などの開催を望む意見があった。

(2) 科目に関しては、概論と方法論（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）のそれぞれに対して、演習を組み合わせ実施した（資料2参照）。2日間という日程の都合上、概論の中で実習マネジメント、実習プログラミング、実習教育評価を盛り込む形になり、具体的に展開するには限界があった。概論とそれを具体化していく方法論、指導論の関係性の曖昧さを指摘する受講生の意見もあった。それぞれの科目の位置づけを明確化し、実習教育の骨格を再構成していく必要がある。また、講義科目と演習・実習の関係性を含めたシステム構築が必要とされている。

(3) シラバス（講習プログラム内容）に関しては、受講者から様々な意見が寄せられた。

実習前の準備として、実習の意味や意義を理解し、モチベーションを高めることの重要性に関してはインタビューに協力してくれた教員間で共通の認識があった。資格ありきで受講する学生たちのモチベーションの低さが実習教育の難しさとして挙げられ、そこをいかに高めるのかということを講習内容にも盛り込んでいく必要がある。

また、今回の講習が日程的にも短期であり、具体的な内容に踏み込めなかったことから、本格実施になる際には、もっと具体的な教材の使用とその応用に関する演習を盛り込んでほしいというニーズが高かった。単にツールの使用を説明するだけでなく、対象の変化に耐えうるような応用スキルを含めて教えてほしいということである。年々変化する学生たちにどう対応していくのかという点で、教員にも柔軟性が求められているのである。

そのことと矛盾するようであるが、実習教育をマニュアル化することは困難であるが、せめてガイドライン的なものを提示してもらえるとわかりやすいという意見もあった。実習先との契約、実習を継続させるべきかどうかの判断や、実習の評価に関して、一定の枠組みを示す必要性が指摘された。

また、大学だけで実習が成り立つわけではないことから、現場の実習指導者との連携、に関

する内容についてもニーズが高かった。特に、「実習施設における精神保健福祉士の実情（業務）の把握」、「実習指導者に対する養成校の教育システムの説明」、「学生と実習施設・指導者とのマッチング」、「実習（学生）のもたらす現場への効果に関する認識」といった項目に関して、事後アンケートで認識に変化が見られた。PSW協会との共催により、実習指導者の話を聞く機会を設けることができたことも一因なのではないかと推測される。実習を依頼していく上で、一方通行な依頼ではなく、大学の教育プログラムについて意見交換を行ったり、現場や地域に貢献する姿勢をもつこと、それを具体的に展開するための方法論などに関しても盛り込む必要性があると考えられる。

(4) 講師の要件については、教員としての経験年数でははかりきれないという意見が多かった。キャリアというよりも、いろいろな工夫をしており、自身が成長をめざしている人材という意見がインタビューでも見られたが、教員も様々な変化に即応することが求められる時代であり、そうしたニーズの反映だと考えられる。

また、(3)とも関連するが、講習の講師として、今回もPSW協会との共催部分で話を聞くことができたが、同様に現場で実際に学生を指導しているPSWの話を聞きたいという意見も挙がっていた。

(5) その他として、今回は試行的な講習であったために準備が十分に整わなかったが、教材とテキストの充実を望む声が多かった。また、講義系科目と実習・演習授業のすり合わせの必要性、講習で学んだことに関して、課題や評価を設けるか否か、継続研修へのニーズは高いが、それをどう位置づけるかなど、本格実施に関連する課題が出された。

以上

#### 研究委員会

委員長	藤井 達也	上智大学 総合人間科学部
委員	岩崎 香	早稲田大学 人間科学学術院
委員	山田 伸	聖康会病院
委員	行實志都子	文京学院大学 人間学部
委員	伊藤 千尋	法政大学 現代福祉学部

